

42394

教科書文庫

4

810

42-1943

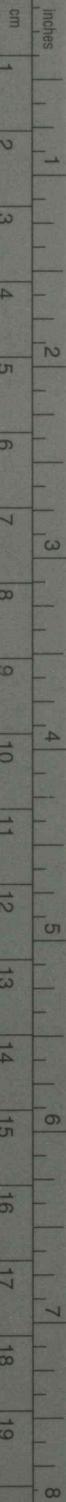
20000  
65648

# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

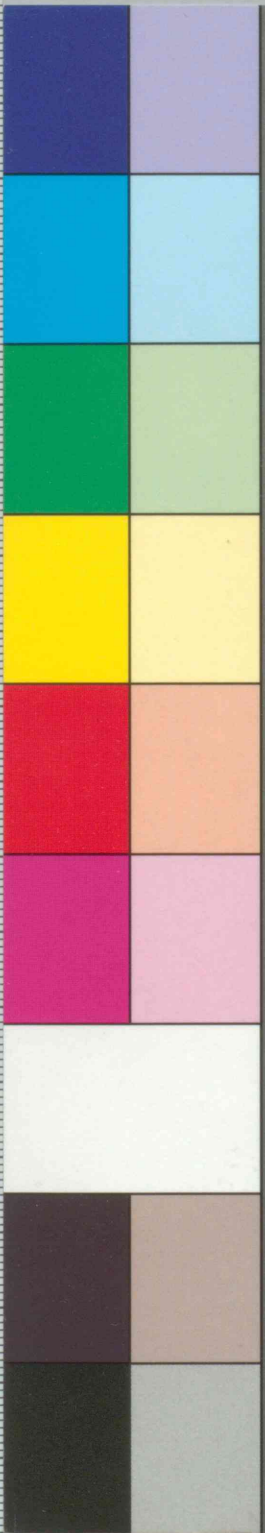
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



聖代女子國語讀本  
吉田教則編  
八

資料室

日五十月七年八十和昭  
濟定檢省部文  
科語國校學女等高

46  
810  
BB18

女子國語教科書

聖代女子國語讀本



聖代女子國語讀本 卷八 目次

一	皇道	清原貞雄	一
二	日本海と太平洋	島崎藤村	三
三	太平洋時代	鶴見祐輔	七
四	歌人西行	藤岡作太郎	元
五	夜二題	樋口一葉	天
六	百蟲譜	横井也有	豊
七	年賀狀二篇(書簡)	(諸家)	只
八	花月草紙抄	松平定信	三
九	無憂華	九條武子	天

〇	女子と平假名	吉澤義則	卷
二	正行の母	(太平記)	壹
三	いざよふ月	阿佛尼	夫
三	行く川の流	鴨長明	全
四	芳宜園大人を祭る	村田春海	壹
五	四季小品		
一	春雨	中島廣足	允
二	夏草	藤井高尙	一〇〇
三	きぬた	清水濱臣	一〇一
四	冬のころ	伴蒿	一〇二
六	川柳	金子元臣	一〇三

二七	諺	藤井乙男	一〇九
二八	天明調(俳句)	(諸家)	一一八
二九	おらが春	小林一茶	一二〇
三〇	家庭の平和	泉道雄	一二五
三一	讀書の意義	阿部次郎	一三三
三二	國語の愛護	五十嵐力	一四二
三三	隅田川	(謠曲)	一五〇
三四	日本新女性の歌(詩)	與謝野晶子	一六〇
三五	婦人の内助	穂積重遠	一六四

—(目次終)—

聖代女子國語讀本 卷八

一 皇 道

清 原 貞 雄

清原貞雄  
史學者、文學博士、廣  
島文理科大学教授、  
大分縣の人、明治十  
八年生。

○王道  
○霸道  
○簡明

支那では國を治める道を王道と霸道とに分かつて居つて、昔から王霸の論は儒教でも最もやかましいものである。王霸の別を簡明に云ひ現せば、徳を以て治めるのが王道であり、力を以て治めるのが霸道である。終始徳を以て民に臨ませられた我が御歴代の政治は正しく王道であると見なければならぬ。然し支那の王道の説明を以て其のまゝ現す事は困難であつて、王道に於いては見る事の出来ない特殊の要素を含んで居る。故に王道と區別して特に皇道の名目を立てるのである。

給うた

○聚智主義

○しらす

○君臨する

○うしはく

皇道は肇國以來、我が御歴代の天皇の國を治めるに據り給うた道、又現に據り給へる道である。然らば皇道の内容は如何なるものであるか。獨斷を避けて衆と共に議する所の聚智主義の政治、民の利益を重んじ給ふ所の御精神等も、固より我が皇道の一要素であるが、是等の外に考ふべき所は少くない。

第一に「しらす」の政治を以て治國の理想として居られる事である。「しらす」は「知る」の延言であつて、「統治する」の意味である。此の「しらす」の語を、同じく君臨する意味を有する所の「うしはく」なる語と區別して用ひて居る事は、我が皇道政治の上に於いて極めて深い意義を有つて居るのである。此の區別を最も明瞭に現して居るのは、武甕槌神が天神の命を受けて、出雲國に在る大國主命に對して其の領國を天神の御子に奉るべき事を交渉した時に傳へた天神の御言葉である。「汝がうし

○すめらみこと

はける葦原中國は吾が御子のしらすん國なり。」とある。「しらす」と「うしはく」とを區別して用ひたのはこれが初めてであるが、天照大神の神勅にも「爾皇孫就いて治らせ。」とある。其の後天皇の統治を云ひ現すには必ず「しらす」の語を用ひ、決して「うしはく」とは云はない。また天皇を「すめらみこと」と申す。「すめ」は統べる事である。「みこと」は御事であつて、「方」と同じく人と云ふ語の敬稱である。統べる方と云ふ意味である。即ち、天皇は國家を統べしらし給ふのである。「うしはく」の「うし」は「主」と同語であつて、所有者を意味し、「はく」は「刀を佩く」又は「下駄を履く」の「はく」で身に附けて居る事である。即ち「うしはく」は自分の私有物とするのである。「しらす」には公共的の意味があり、「うしはく」には私的の意味がある。昔から天皇が常に民の利益を先とし給ひ、政治は國家國民のため

○文武  
○剛柔  
○中正

鼎

に行ひ給ひ、御自身の利益のために行はせられなかつたのは斯く「すべしらす」事を政治の原則とせられたからであつて、我が國體上極めて重要な事實である。

第二は文武剛柔、何れの極端にも陥らず、よくその調和を保つて中正の政治を行ふを理想とせられた事である。我が國傳位の信標、國家最高の寶物として天照大神が皇孫に授け給へる三種の神器こそ、實にその理想を表現したものである。

支那に於いては鼎を以て傳位の寶器として居る。蓋し農を盛んにして食物を豊富にし、之に依つて人民の生活を安らかにする事が王者の天職であると云ふ思想である。之に對して我が國の神器は鏡劍璽の三種である。此の三種が國家の寶器として選ばれた精神に就いては、古來種々の解釋が行はれて居るが、その起源をなすものは、蓋し日本書紀仲哀天皇の條に見える

○ますみの鏡

所の記事であらう。即ち天皇が筑紫に行幸の時に、筑紫の五十迹手なるものが璽鏡劍の三器を捧げて天皇を奉迎して次の如く申し上げた。

八尺瓊の勾れるが如く以て曲妙に天の下しろしめせ、白銅鏡の如く以て分明に山川海原を看行せ、乃是の十握の劍を提げて天下を平けたまへ。

鎌倉時代以後、神道を論ずるもの多くは此の五十迹手の言に依つて我が三種の神器の意義を説いてゐるのである。

吉野朝時代に於いて北畠親房は其の著神皇正統記に三種神器に就いて次の如く述べて居る。

鏡は一物をたくはへず、私の心なくして萬象を照らすに是非善惡の姿あらはれずと云ふ事なし。その姿に従ひて感應するを徳とす。これ正直の本源なり。玉は柔和善順を徳とす。

○萬象

○柔和善順

○剛利決斷

慈悲の本源なり。劍は剛利決斷を徳とす。智慧の本源なり。この三徳を翁受けずしては天下の治らんこと誠に難かるべし。

○配する

即ち鏡に正直の徳を配し、玉に慈悲の徳を配し、劍に智慧決斷の徳を配し、これを以て我が國の政治の理想とすると云ふのである。

中庸  
四書ノ一。  
○註解

徳川時代に入つてからは、多くの學者が之を智仁勇の三徳に配當し、支那の中庸は我が三種神器の註解であると説いて居る。勿論これらは後世になつてからの説であるが、三種の神器が傳位の信標であると言ふばかりでなく、鏡璽劍の三種が特に選ばれて居ると云ふ所に必ず確乎たる意義を含んで居るのであつて、其の如何なる意義であるかに就いては人に依つて色々の説があるであらうが、大體に於いて鏡が公明正大を表し、玉が仁惠

○確乎

○公明正大

を表し、劍が武徳を表す事は間違無いと思ふ。北畠親房が神皇正統記の中に、天壤無窮の神勅及び「此の鏡を視ること朕を視るが如くせよ。」と云ふ神勅を記した後に、

又この鏡の如くに分明なるをもちて天下に照臨し給へ、八坂瓊のひろがれる如く曲妙を以て天下を治食せ神劍を提げて歸順はざる者を平らげ給へと勅り坐しけるとぞ。

と云つて居るのは、仲哀天皇紀にある五十迹手の語を神勅であるとした鎌倉時代の神道家の説を、其のまゝ取つて居るのであつて、古傳とは違つて居るが、三種神器の表す統治の理想は正しくそこにあつたものであらう。即ち鏡は萬象をあるがまゝに映すものであつて少しの偽をも容さない、之は正直公明正大の徳を表す。璽は圓滿であり、且つ潤澤のあるものであつて、仁慈の徳を表す。劍は剛利決斷の武の徳を表す。是等の諸徳は個

○古傳

○潤澤



○論許

人の守るべき道徳としても其のまゝ價値を有つて居るのであるが、之を政治上の理想に充てはめる時は、公明正大にして少しの陰影もなく譎詐も無いことと、仁慈を旨とする所の「しらす」の政治を根本とする理想を鏡と璽とに依つて表現して居ると見る事が出来るであらう。

○無抵抗主義

斯く仁慈を旨とするも、所謂無抵抗主義では無い。我が國の理想は強國主義である。鏡と玉とに依つて表明するところの「しらす」の政治を受け入れずして何所までも反抗せんとする不逞の徒に對しては、斷乎として破邪の劍を振ひ天誅を加ふるのである。或は外部から來つて我が國を侵さんとするものあらば之を打ち攘ふのである。此の剛に偏せず柔に偏せざる中庸の政治こそ實に我が皇道の特色である。

第三は空理に囚れず、時の宜しきに順應して最善の政治を行

○不逞の徒  
○破邪  
○天誅

○時の宜しきに順應する

○休戚

ひ、必ず統治の美績を擧ぐることを理想とする事であり、第四は常に正しきを養ふ心を以て心とし給ふ事、第五は天皇は國家を以て家とし、國民と休戚を共にし給ふ事である。此の三つは何れも神武天皇が大和を平定して橿原に都を定め給うた時に降された詔勅に現れて居る。

我東を征ちしよりこゝに六年なり。天神の威を被りて兇徒は殺されたり。邊の土未だ靜らず、餘妖尙ほ荒れたりと雖も、而も中國には又風塵なし。誠に宜しく皇都を廣め披き、御殿をはかり作るべし。而して今、運この屯蒙に屬ひ、民の心素朴なり。巢に棲み、穴に住む習俗、常となれり。夫れ大人の制を立つるや、義必ず時に従ふ。苟も民に利あらば、何ぞ聖の造に妨はん。山林を披き拂ひ、宮室を經め營りて、敬んで寶の位に臨み、元々を鎮め、上は天つ神の國を授くるの徳に答へ、下は皇

○六合

○八紘

孫の正しきを養ふ心を弘め、而して後に六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて家となさんこと、亦よからずや。

○顯現する

○時宜に適す

「義必ず時に従ふ、苟も民に利あらば何ぞ聖の造に妨はん。」と云ふのは、只形式を整へ、徒に高遠なる理想を立てて、それが實際に顯現するや否やを顧みざるが如き無意義なる事を斥けて、只其の時宜に最も適したる政治を行ひて、専ら國民の利益を主とし給ふ精神を示したものである。「下は皇孫の正しきを養ふ心を弘め」と云ふのは、上、天つ神に答へ奉るに對して、下は國民のために、常に正道を踏んで正しき政治を行ふ事を目標として何所までも努め給ふ御心である。「八紘を掩ひて家となす」と云ふのは、政治を以て何所までも公事となして、私事、私家の利益のためとなさざる事である。我が國に於いては、天皇は國家全體を表現して居られるのは此のためである。佛蘭西のルイ十四世

○專制主義

が、「朕は國家なり。」と云つたのは、極端なる專制主義を表明した言葉であるが、日本に於いて天皇即國家と云ふのは、日本と云ふ國が天皇御一身に依つて表現せられて居り、天皇を外にして國家なく、天皇の御榮えは國家の榮えである事を意味するのである。仁徳天皇が「百姓の富めるは朕の富めるなり。」と宣はせられたのも同一の御精神である。我が國に於いては國家の外に天皇があらせらるゝ事は考へられない。我が皇室に姓名の無いのも此のためである。

我が皇道は以上を以て盡きて居るのではない。是等は何れも我が皇道の最も貴き所以の根本であつて、此の皇道に依つて三千年來惠まれ來つた國民の、常に心に銘記して居なければならぬ所である。

(日出づる國)

○銘記する

島崎藤村

小説家、詩人、名は春樹、長野縣の人、明治五年生。

## 二 日本海と太平洋

島崎藤村

ブランデス  
デンマークの評論家。(西暦一八四一—一八七五)  
心にくく

過去の日本人が日本海であるとするなら、現代の日本人は太平洋であると言つてもよからうか。太平洋に就いて想ひ當るのは最近讀んだものの中に見つけたブランデスの言葉だ。ブランデスは太平洋が地球の諸海洋に伍し占めてゐる地位に比べて、實に心にくいことを言つてゐる。

「太平洋、則ち靜かなる大洋は、最大にして同時に最深の海洋である。併し實際に靜かなのは、唯その帶狀の一部分に過ぎない。太平洋の北部と南部とは、様々の氣流や貿易風のために、絶間なく波濤を擧げてゐる。幾多の海潮、その逆潮、暖流、寒流が流れ巡つてゐる。太平洋には、また他の海洋には無い地震の波動がある。」

○包容する

○創造的精神

とこんなことが言つてあるのだ。われらは東西の文化を包容し得る最も恵まれた位置にあつて、過去に蓄積したものだけでも既にかなりの深さに達してゐるからと言つて、現代の創造的諸精神が皆われらの中に流れ込んで來ると考へるほど已惚れの強いものではないが、すくなくも平和を愛し、また靜かさを愛することに於ては他のいかなる國民にも劣るものでないと思ふ。これ、われらの太平洋であり、靜かなる大洋である所以だ。

しかしわれらが現に營みつゝある歴史と活動の中には、廣い和やかな一帯がある外に、強い嵐があり、暖流と寒流とがあり、幾多の海潮とその逆潮とがあり、それから地震の波動があることもまた太平洋に似てゐる。あのブランデスの言葉の中に多くの反省すべきものがあると感ずるのは、おそらくわたし一人で

はあるまいと思ふ。

曾て山陰地方への旅をして、城崎に近い瀬戸の日和山からも、香住の岡見公園からも、浦富出雲浦等の海岸からも、あるひは石見の高角山からも日本海を望み見た。あの海岸に連り續く高い岩壁は、大陸に面して立つ一大城廓に似てゐた。五ヶ月もの長さに互るといふ冬季の日本海の活動から、その深い風雪と荒狂ふ怒濤とから、われくの島國を守るやうな位置にあるのも、あの海岸の岩壁であつた。そこには到るところに湧き出づる温泉があり、金銀、鐵、石炭その他の礦物を産する無盡藏の寶庫があつた。かのラフカヂオールヘルンをして、「これより麗しい洞窟は世界中殆ど想像し得ない。」と言はしめたほど、空氣の如く明澄な海水を内に湛へ、また幾多の古い傳説が生まれて來てゐる

城崎 兵庫縣の日本海岸に近い温泉町。  
香住 兵庫縣城崎郡。  
浦富 鳥取縣岩美郡。  
出雲浦 鳥取縣城崎郡。  
高角山 島根縣那賀郡。

○無盡藏  
ラフカヂオールヘルン  
小泉八雲 英國人であつたが明治二十三年來朝歸化した、英文學者、明治三十七年歿、年五十五。

る數限りもないやうな洞窟によつて飾られてゐるのもあの海岸であつた。この腰骨の強さこそ、大陸的なものをよく受けとめることの出來たわれらの祖先の姿であつたらう。

しかし過去の日本人が日本海であると言つて見たいのは、ただその海岸の特色のみには限らない。翠色の滴るやうな日本の島影を後方にする位置にまで出て行くなら、そこには濃い藍色の黒潮も流れて來てゐる。朝鮮支那印度はもとより、どうかするとペルシヤから印度を通して來た希臘的なものまでがこの島國に著いた時代もあつたらうかと想像されるのもその海だ。遠い古代の遣唐使船が航路としても、いづれはその海の上であり、雪舟のやうな畫僧が中世の終に生まれて南支那の宗教と藝術とを探り求めるために風波の困難を凌ぎ進んだのもまたその海の上であつたらう。おそらく揚子江の河口から押し來

雪舟 畫僧、本名は小田等揚、備中の入、永正三年(二六〇)歿、年八十七。

○見て取る

る滔々たる濁流を見た眼で、大陸を離るれば離れるほど青さを増す日本海の色を見たほどのものは、過去の日本人の特色が、およそどの邊にあつたかといふことを見て取ることも出来ようと思はれる。

○近代  
○曙光

わたしは太平洋を日本海に置きかへて見るところに萬葉集をも感じるし、また近代の曙光を望み見るやうな雪舟の藝術をも感じる。

ともあれ、われらの眼に映る大洋は、最早涯も無く續いてゐる大海原ではなくて、彼岸へ渡ることの出来る大洋である。東は東、西は西で、永遠に逢ふこともなからうと言ふ人もあつた二つのものが、日本に於いて相會しようとしてゐるとも考へられる。

(桃の雫)

鶴見祐輔

評論家、政治家、群馬縣の人、明治十八年生。

○深々

### 三 太平洋時代

鶴見祐輔

黒潮の貫き走る太平洋といふ海が、日本の岸邊を溶々と洗つてゐる事の深い意味が、近頃ますます強く私に迫つてくるやうな氣がする。私はこの大きい海をいろ／＼のところから眺めた。太平洋上の十字街路といはれるハワイの碧い波も見た。

やがては太平洋岸のニューヨークになるといふ、南加州はロスアンゼルスロサンゼルスの港の水の温ぬむのも見た。古今千年の夢を封ずるロマンチックなジャワの島蔭の藍色の濤も見た。二十世紀の風雲を懐に抱くパナマの町のほとり、烈日の下にきらきら輝く水も見た。しかし、何と言つても、私は太平洋は日本の海だと思ふ。

一月の初にも、青い葉蔭に蜜柑の薫る伊豆半島から見た海路、

ハワイ

太平洋中の群島で、米國に屬してゐる。

南加州

米國の太平洋岸カリフォルニア州の南部。

パナマ

パナマ地峽のパナマ運河の西口の町。

○汪洋と  
追ひ。

○芙蓉峰

桃の花の咲きこぼれる折、ぼか／＼とした春の日ざしを背にう  
けながら眺めた駿河灣の碧い水楠の大樹の影をひたしたまゝ  
汪洋とうねる土佐灣の海波、それらの一切が日本の太平洋であ  
る。北の方には鮭を追ひ、南の方には鮪を漁るのが日本の太平  
洋である。駿河灣の波打際から一躍天に迫る一萬二千尺の芙  
蓉峰ともなれば、伊豆の大島から四五里にして、一落六千尋の世  
界第一の深い海ともなるのが、日本の太平洋である。

天はこの小さい島の中に、寒帯と温帯と熱帯との動植物を與  
へ、海に近き最高峰と陸に近き世界最深海とを與へ、積雪五尺の  
寒威と五丈の竹藪を生ずる熱氣とを併せ與へ、スキスの風景に  
フランスの氣候を恵み、一つの民族を二千五百年の間閉ぢこめ  
て置いて、全世界の國々の榮華の次ぎ／＼と繪巻物の様に繰り  
盡くす日迄、この國を保存してくれたのである。この一切の恩

○劫初

○翠浪皓波

○祕藏息子

○脚光を浴びる

○所詮

惠は、太平洋といふ海の賜なのだ。劫初以來、幾萬年、幾千萬年、滔  
滔とこの島根を洗つてゐた海の上に、とうとう全世界の文化の  
中心が廻つて來たのだ。

さうだ、太平洋時代といふ大きい時代が、いまこの翠浪皓波の  
上にめぐつて來たのだ。さうして、その海の一人の祕藏息子と  
して、その懷に深く抱いてゐた日本といふ島が、この大きい舞臺  
の上で、満身に脚光を浴びて立たなければならぬときが來たの  
だ。

併し、私はそれをたゞに耳に快き日本至上主義の讚美歌とし  
て謳ふのではない。天と地との恩恵が、さういふ時代と境地と  
を吾々に與へてくれたとしても、この島の上に住む人々がその  
大きい運命の高さにまで伸び上る事が出來なかつたなら、所詮  
は、それが空しき天の時であり、空しき地の利に終るのではない

○恩寵

か。  
それでは、吾々は、どうしてこの大きい運命の呼び聲にこたへるか。 どうしてこの大きい海の恩寵に報いるか。 それは未來のことである。 しかし、未來の暗示は過去の史實の中にあるのだ。 五千年の記録された人類史の中におなじやうな運命に恵まれて、見事に花を咲かせた民族が一つならず二つまでもあつたのだ。 その二つの民族の足跡をたづねて見れば、この大きい運命の扉の前に立つてゐる日本民族の大きい啓示がわかるのだ。

○啓示

世界中で一番大きい海  
太平洋の面積約一八〇二二萬方浬。

今までに人類の文化は、二つの大きい海の周圍に榮えた。 その一つが地中海といふ海で、いま一つが大西洋といふ海であつた。 さうして、世界中で一番大きい海が最後まで残されてゐた。 その海が太平洋なのだ。 地中海に比べて七十倍、大西洋に比べ

○遮斷する

て二倍もある大きい海が、この太平洋なのだ。  
その過去の二つの海は、それ／＼一つづつの秘藏息子を持つてゐた。 地中海といふ海は、オリヴの花咲く希臘といふ小さい半島を――三方は水に圍まれて、北の方は高い峰で大陸と遮斷された島同様の小さい半島を、その胸の中にしつかと抱いて育んだ。 この小さい半島の中から、世界に比類のない偉人の數が出て來て、手のひらほどの土地に世界文化の萌芽を養ひ、やがては燦然と眼もあやなる文明の花を咲かしたのであつた。

○眼もあやなる

アメリカ大陸の發見  
西曆一四九二年コロムブスが發見した。

その地中海の文明時代が、アメリカ大陸の發見とともに、大西洋に移ると、またこの大きな海が一つの小さい土地を選んで、大事な秘藏息子として育てあげた。 それは冬も芝生の青々と繁るイギリスといふ小さい島であつた。 僅か三十浬の海峡で、大陸と絶縁されたこの國は、海に陸に富強の實を擧げて、やがて朝

○絶縁する

○榮光

○絢爛

○中樞

古々椰子



○好尚  
○現實享樂

日のやうな晴れやかな國運をひらいた。希臘の文明が去つてから、もう二千年になる。しかし、それは偉大なる莊嚴さを備へて、今日も西歐文化史の最高位に輝いてゐる。その榮光は、人類の存續する限り永久に消え失せないであらう。  
イギリスの文化は、希臘ほどの絢爛さはない。しかし、何といつても、大西洋文化時代の中樞を握つてゐる。そして、古代希臘の文運が羅馬といふ現實的大帝國に移つたやうに、今やその文化は、アメリカ合衆國といふ物質的には無比の強大國に移りつつあるのである。

しかしながら、眞の文化は、古々椰子の如く水のほとりてなく、ては榮えない。大陸の風土と産物とは、人の氣を荒立たせる、人の視野を狭くする、好尚を俗惡にする、現實享樂の生活に墮せしめる。この時、海のみが——ひとり海のみが、汪洋として千古

厭うて

○中庸の徳  
○欣求する

アゼンス  
アテネ、現ギリシヤ  
共和國首府。

○搖籃

○發祥する

○範疇

にわたる波濤の純潔さて、人間に永遠を慕ふ心を惠み、その視野を廣くし、その性情を簡素にし、その趣味を高雅にし、極端を厭うて中庸の徳を愛せしめ、力を禮拜せずして、心靈を欣求せしめ、手を額にして日輪沈む西方不朽の境を憧憬せしめる。

故に、永久の文化は水に圍まれる國に起つた。その適例が古代希臘の小さい都市國家である。國土に於いては、日本の九州か北海道ほどで、人口に於いては、最大のアゼンスすら精々七十五萬餘に過ぎない小さい希臘の都市國家がそれである。今日全盛期にある西洋文明の搖籃は希臘にある。哲學史學自然科學詩歌戲曲彫刻建築數學の一切が、この小さい半島から發祥してゐる。否、發祥したるのみならず、今日の文化を以てしても、猶その範疇を脱しきらないではないか。

今日希臘の古蹟を發掘すると、到る處から現れるものが悉く



燃えて

藝術的の價値がある。これに反して、羅馬郊外の土中から掘り出されるものは、殆どロンドンの塵箱中の瓦礫と異ならない。それは古代希臘人のすべてが、不朽なる美を創造せんとする一念に燃えて居たためである。しかも、その希臘の美は、單純さと純眞さとを持してゐたので、他國の藝術のやうに、不自然なる裝飾的精神に驅られて居なかつたといはれてゐる。

生まれる

この點に於いて私は、日本精神と希臘精神との共通性を強く感じる。私はつねに、日本精神の偉大は、その單純性と中庸性と、調和性にあると思つてゐる。單純を好むの心は自然のまゝの眞を好むの心であり、生まれたるまゝの誠を好む心である。日本古代の宗教や建築や文學を見るものは、如何に吾々の祖先が單純を好みたるやを知る。去つて支那に行け、印度に行け、埃及に行け、これ等の國々の色彩の如何に強烈であり、裝飾的であ

悟入する

或る者  
ヴァン・ルーン。

具現する

〇一新紀元を劃する

るか。日本と希臘と、そしてイギリスの色彩の簡素であり、自然であるのは、これ實に島國の特權である。水の恩寵である。大陸の民族の悟入する能はざる精神の純潔である。それから私は中庸といふことを言つた。この中庸の精神は、明らかに日本の精神である。しかるに、西洋の史學者の或者は、希臘の勃興を説いて、一人類の歴史に於いて、中庸の徳を最も民族的に具現したのは希臘人である。」と述べ、「この中庸の徳操が現れて、始めて人類文化が一飛躍をなして、従前の野蠻時代に一新紀元を劃した。」と言つてゐる。しかし、それは其等の人が日本民族の歴史を知らなかつたためである。私は、日本民族の偉大はこの中庸性にあつたと思ふ。吾々の祖先は、大陸人のやうに極端な性情を持たない。一個の氣品ある中庸の性情が、日本古代史を一貫してゐる。感情に於いても、美を慕ふ情操に於

○深刻  
○神韻

いても、道德に於いても、生活に於いても、日本民族は大陸の人々のやうに、深刻にも極端にも流れなかつた。そこには一種の神韻とも言ふべき氣品があつたと思ふ。

○倫理的

それから、日本民族の偉大はその調和性にある。吾々日本人は、殆ど無意識に周囲と自分との調和といふことを考へて居る。それは倫理的といふよりも、むしろ藝術的本能からである。吾は、自分一人の生といふよりも、自分が家族といふ周囲、村といふ周囲、國家といふ周囲、さらには宇宙といふ周囲に、如何に調和すべきやと言ふことを本能的に求めてゐる。それは、調和なき社會は美しくない社會であるからだ。その大なる全部といふことをあまり始終念頭に置いて、そのために、小さい我を犠牲とすることをあまり修養したために、吾々日本人は個性の發揚といふ方面を等閑に附して來た。調和好みの性質が強き心靈

○念頭に置く

○等閑に附する

○自由奔放  
○緩和する

の獨特自由な發達を妨げた。全宇宙の調和といふことについて、外國に教へ得る日本は、個人自由の思想に於いては多くを希臘から學ばなければならぬ。希臘の偉大は、個人自由の精神の發揮であつた。しかも、その自由奔放の精神は、克己自製の徳操で緩和された。この節制と自由との平均が古代希臘を偉くしたのだ。

○劈頭  
サラエーヴォ  
もとの境國領ボスニア州（現在ユーゴスラヴィヤ國）の地、舊セルビヤに控してゐる。

○拍子木

しかし、その希臘は去つた。地中海の文明は移つて、大西洋の時代が起つたが、ついで、歐洲大戰の劈頭にサラエーヴォの一街頭に鳴り響いた銃彈の響は、大西洋時代の幕を閉ぢる合圖となり、同時に、太平洋時代開幕の拍子木であつたかも知れない。とうとう太平洋時代が來たのだ。この時、日本の視野に入つたのが海の向ふの米國なのだ。日本と米國、この大きい二人の立役者を舞臺に置いて、太平洋時代の幕がいま開いたのである。

○立役者

向かはう

日本民族は如何にしてこの大きい運命に向かはうといふのか。水に圍まれた日本は、希臘やイギリスと同じやうな天恵に満ちてゐる。海は青く、日は輝いてゐる。但し、島人は今健在であらうか。いま潮は寄せ、東は白み、海潮音のとゞろきは日本民族の脚下に鳴りわたつてゐる。

この時、曉の巖頭に立つて、聲朗らかに、自由と、單純と、純眞と、中庸との日本精神を呼びおこして、太平洋時代の文化を建立しようとする雄心は、我が若き日本のうちに生まれてゐるであらうか。その爲には、今日の日本は大きい生みの苦しみを覺悟してかゝらなければなるまい、精神の高貴を回復する爲には、民族的青春を回復する爲には。

(北米遊説記)

○雄心

藤岡作太郎

國文學者、美術史家、文學博士、號は東圃、石川縣の人、東京帝國大學助教授、明治四十三年歿、年四十一。

俊成

藤原俊成、定家の父、鎌倉初期の歌人。

○難す

○冥加

○いたく

○山家集

西行法師の歌集。

○嘖々

四歌人西行

藤岡作太郎

西行何者ぞ。天涯放浪の行脚僧。其の名を一時の名流俊成と等しくし、鎌倉室町の世、一抑歌道に於いて定家を難せん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべき事なり。」といはれし時、稱讚の聲また定家に譲らず。近世に至つて、定家の價值いたく墜落したれども、山家集の一書はなほ如何なる歌人の机邊をも去らず。西行の名、今に嘖々たるは抑、何が故ぞ。

西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立て、義清亦勇敢にして弓術をよくす。和歌に堪能なるは蓋し其の天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇其の才を愛し、登用せんとす。されど義清は名利を喜ばずして、常に厭離の志あり。其

○天稟  
○北面の士  
○登用す

○厭離

○參朝す  
○頓死す

○惕然  
○遁世  
如來  
釋迦如來

嵯峨  
京都市右京區嵐山  
ある地。

右幕下  
右大將源賴朝。

の出家の動機に就いては、或は傳へて曰く、「嘗て同族左兵衛尉  
憲康と同行して鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝  
參朝せんとて、約に従ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内  
には泣き悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ねれば、『殿は、昨夜頓  
死し給へり。』とて、若き妻老いたる母の重り伏して歎くに、義清  
は惕然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、  
棄<sup>テ</sup>恩<sup>ヲ</sup>入<sup>ル</sup>無<sup>キ</sup>爲<sup>ニ</sup>は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜  
びて取<sup>ツ</sup>繩<sup>ヲ</sup>れるを思ひ切つて縁より下に蹴落し、これこそ愛著の  
絆<sup>ヲ</sup>を斷つ始めぞと、顧みもせて家を遁れ出て、嵯峨に至りて剃髮  
せり。」と。かくて名を西行又は圓位と云ふ。時に保延六年に  
して、歳正に二十三なりき。

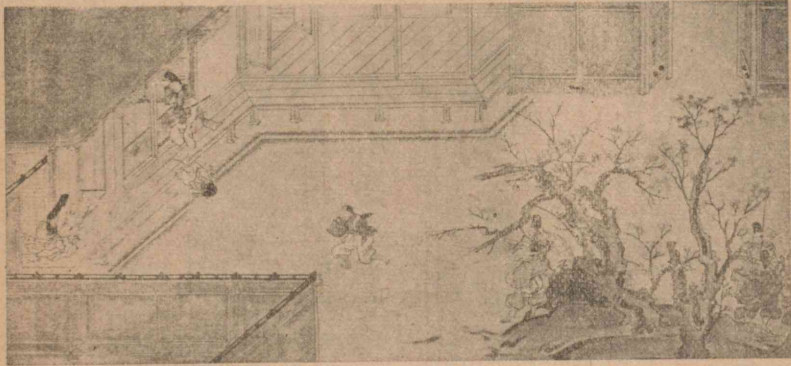
大師  
弘法大師。

○桑門  
○抖擻

○悠々自適

高尾  
京都市右京區高尾山。  
文覺上人  
俗間にある時の名は  
遠藤盛遠。

○數奇  
○嘯く



(西行物語繪卷)

西行の遁世の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。  
常にいへらく、「桑門に家なし、抖擻して  
身を終ふべし。」と。一箇の笠、一條の杖、  
草の枕、苔の茵、東西にさすらひ、自然を友  
とし、悠々自適、興至れば即ち和歌を詠ず。  
高尾の文覺これを惡み、弟子に告げて曰  
く、「遁世の身ならば一筋に佛道修行の  
外、他事あるべからず。數奇を立てて、此  
處彼處に嘯きありく條、憎き法師なり。  
何處にても見あひたらば頭を打割るべ  
し。」と。その後高尾の法華會に、行脚の  
僧の參りあひて、花の蔭などがめ歩き、

○手ぐすねをひく

○まもる

○饗應

○餘念

○體たらく

○いひがひな

入涅槃

入滅、涅槃は不生不滅の義で生老病死を超越した境涯を言ひ又死滅にも言ふ。

○きさらぎ  
○望月

坊に來りて一宿を請ふあり。「誰ぞ」と問へば、「西行と申す者」といふ。文覺手ぐすねを引き、望の叶ひつる體にて、明障子を開けて出づ。暫しまもりて、「年頃承り及びたるに御尋悦び入り候。」とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子達はいかなる事情の出で來んかと手に汗を握りたるに、此の體たらくにて、西行は無事に歸り去りしかば、「日頃の仰に違ひたるは。」と怪しみ問ふ。文覺答へて、「あらいひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずる者の面やうか。文覺をこそ打たんずるものなれ。」といへりといふ。

西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを思ひて、詠じて曰く、

ねがはくは花のもとにて春死なん

そのきさらぎの望月のころ

○晩年  
○洛東  
○閑居す  
○入滅す

○過半

宗祇

足利中世の連歌師、文龜二年(二二六)歿、年八十二。

○私淑す

○正風

○二期を劃す

○風月に放浪す  
○雲水に吟嘯す

○吟囊

○貴紳淑女

晩年洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず建久元年二月十六日、七十三歳にして入滅せり。其の和歌を集めたるもの即ち山家集なり。

我が國古來詩人多しといへども、深く自然に憧れ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へし者前後僅かに三人。西行宗祇芭蕉これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離の折をも厭はず、西行に私淑して其の跡を追ひし者、芭蕉は元祿泰平の機に乗じて、また西行宗祇が行狀を慕ひしものとす。

西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人。各其の道に一期を劃せし三家が、いづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

そも、平安朝の貴紳淑女は、鴨桂二川の流域數里の間をお

○小天地に跼踖す

○刺衝す

○詞花言葉

○典型

○浮華輕薄

○風を成す

○蹶起す

○踏却す

○簸却す

○萬朶の花

○堂奥

のが世界とし、海も見ぬ天地に跼踖して足畿外に出でず、一生の  
經過極めて單調に、感情を刺衝するものなければ、随つて思想の  
發展もあることなし。見聞する所は東山の花、西山の紅葉、いつ  
も同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの和歌も  
變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、唯同じ詞花言葉を飾  
るのみにて累代繼承しゆけば、和歌の思想辭句の上にも自ら典  
型を生じて天真を忘る。實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄、徒に  
形式を飾りて、燦爛たる錦囊、其の内容は空しく、滔々として風を  
成せる時、西行獨り蹶起して、從來踏襲の典型を簸却し、みづから  
山水の間に逍遙して、直接に自然が隱微の聲を聞き、感得すると  
ころは萬朶の花と咲けり。

西行既に古來の典型を捨てて、直ちに自然の堂奥に入らんと  
す。深く山川草木を愛して、之を視る事猶己を視るが如く、親昵

して、同情の念に堪へざるは固より然るべき事なり。

わきて見ん老木は花もあはれなり

いまいくたびか春にあふべき

こゝにまた我が住みうくて浮かれなば

松はひとりにならんとすらん

同情は進んで愛著となりぬ。臨終の大事到る時何物か伴な  
はん。一切の眷屬珍寶皆我と相忤く。かくはかなみて西行は  
官祿を捨てたり、妻子を捨てたり、すべて世間を捨てたり。され  
どゆかしき花よ、月よ。一旦の沈淪に昨日の親友も今日の仇敵  
たる時、山色水聲の我に睦ぶこと舊に依り、訪ふ人も無き山里に  
心永き春秋は尋ねることを忘れず。此の親切なる自然に對し  
て、其の慰藉に報ゆることを知らざる者は冷血無情の人のみ。  
西行は最も自然の價値を認めたるもの、随つてこれが愛著の念

○はかなむ

○沈淪

○慰藉  
○冷血

○選を異にす

は遙かに群衆と選を異にしたり。

おのづから花なき年の春もあらば

何につけてか日を送らまし

○うちつけに

うちつけにまた來ん秋の今宵まで

月ゆゑ惜しくなる命かな

○眞如の月

愛著は迷なり。此の雲を去らざれば眞如の月は明らかなり

難しと雖も山水もと無心にして、人間の如き魔性を有せず。こ

れを以て窓前日夜の友とす。清淡虚無、一心もまた物によつて

動かされざることを山の如く、機に随つて轉ずること水の如し。

來往自在、こゝに疑懼の境も去つて、安心は漸く決定すべし。

○清淡

○機に随つて轉ず

○來往自在

今更に春を忘るゝ花もあらじ

やすく待ちつゝ今日も暮さん

雲に唯今宵の月をまかせてん

○てん

○斧鑿の痕

いとふとてしも霽れぬものゆゑ

西行の歌は企ててなすものにあらず。次に擧ぐる所の歌に  
より、其のいかに自然にして平易に、斧鑿の痕なきかを見よ。

ながむるに慰む事は無けれども

月を友にてあかすころかな

今よりは昔がたりは心せん

あやしきまでに袖しをれけり

要するに、西行は生まれながらの歌よみにして、歌を作るもの  
にあらず。天籟吹來つて松濤乃ち鳴る、其の聲必ず自然を離れ  
ず。平易率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることも亦強し。  
時に婉曲の響あれども殊更に人爲の巧を加へねば、天成の詩美  
は千歳の下愈、光を増して、後人をして渴仰止まざらしむるなり。

(國文學史)

○天籟

○松濤

○平易率直

○人爲の巧

○千歳の下

○渴仰止まざらしむ

樋口一葉  
小説家、山梨縣の人、  
明治二十九年歿、年  
二十五。

五夜 二、題

樋口 一葉

一雨の夜

つべし  
てき

庭の芭蕉のいと高やかに延びて、葉は垣根の上やがて五尺もこえつべし。今歳はいかなれば、かくいつまでも丈の低きなど言ひてしを、夏の末つ方、極めて暑かりしに、唯一日・二日・三日とも數へずして、驚くばかりになりぬ。

風情  
音なひ

秋風少しそよ／＼とすれば、端のかたよりはかなげに破れて、風情次第に淋しくなるほど、雨の夜の音なひ、これこそは哀なれ。こまかき雨は、はら／＼と音して、叢がくれ鳴くこほろぎのふしをも亂さず、風一しきり、さと降り來るは、彼の葉にばかり懸るかといたまし。

雨はいつも哀なる中に、秋はまして身にしむことおほかり。

せんなし  
疊紙

たまさか  
はか／＼しう  
打返し  
そ／＼に

更け行くまゝに、燈の影などうら淋しく、寝られぬ夜なれば、臥床に入らんもせんなしとて、小ぎれ入れたる疊紙とり出し、何とはなしに針をも取りぬ。未だ幼くて伯母なる人に縫物ならひつる頃、衽先、袂の形などむつかしういはれし、いと恥づかしうて、これ習ひ得ざらんほどはと、家に近き某の社に日參といふことをなしけり。思へばそれも昔なりけり。教へし人は苔の下になりて、習ひとりし身は大方物忘れしつ。かくたまさかに取出づるにも、指の先こはきやらにて、はか／＼しうは得も縫ひ難きを、彼の人あらば、如何ばかり、言ふかひなく、淺ましと思ふらんなど、打返し、その昔戀しうて、そ／＼に袖もぬれ



樋口一葉



そふ心地す。

遠くより音して歩み來るやうなる雨、近き板戸に打ちつくる騒がしさ、いづれも淋しからぬかは。老いたる親の瘡せたる肩もむとて、骨の手に當りたるも、かゝる夜はいと心細さのやる方なし。

二月の夜

村雲すこしあるもよし、無きもよし、磨き立てたるやうなる月の影に、尺八の音の聞えたる、上手ならばいとをかしかるべし。三味も同じこと、箏は西片町あたりの垣根ごしに聞きたるが、いと良き月に、弾く人の影も見まほしく、物がたりめきてゆかしかりき。

親しき友に別れたる頃の月、いとなくさめ難うもあるかな。

千里の外までと思ひやるに、添ひても行かれぬものなれば、唯羨

○かは  
○とど

○をかし

○まほし

○千里の外

○はかなき事

ましうて、これを假の鏡となしたらば、人の影もうつるべしやなど、はかなき事さへ思ひ出でらる。

さゝやかなる庭の池水にゆられて見ゆる影、物いふ様にて、手すりめきたる所に寄りて、久しう見入るれば、はじめは浮きたるやうなりしも、次第に底深く、此の池の深さ、いくばくとも測られぬ心地になりて、月は其の底の底のいと深くに住むらんものやうに思はれぬ。久しうありて仰ぎ見たるに、空なる月と水のかげと、いづれを眞の形とも思はれず。物狂はしけれど、箱庭に作りたる石一つ水の面にそと取落せば、さゝ波すこし分かれて、これにぞ月の影たゞよひぬる。かくはかなき事して見せつれば、甥なる子の小ささが眞似て、姉さまのすること我もするとして、硯の石いつのほどに持て出でつらん、我もお月さま碎くなりとして、はたと捨てつ。それは亡き兄の物なりしを、身に傳へていと

○物狂はし

○罪得がまし  
○さながら

○夜なく

○うとうとし

○さるべき人

○ぬべし

○辻占うり

○魂あくがる

大事に思ひたりしにはかなきことにて失ひつる、罪得がましきことと思ふ。此の池かへさせてなど言へども、未ださながらにてなん。明けぬれば、月は空にかへりて、名残もとゞめぬを、硯はいかさまになりぬらん。夜なく、影やまち取るらんとあはれなり。

嬉しきは月の夜の客人、つねはうとくしくなどある人の、心安げに訪ひ寄りたる、男にても嬉しきをまして女の友のさるべき人ならば、如何ばかり嬉しからん。自ら出づるに難からば、文にてもおこせかし。歌よみがましきは憎きものなれど、かゝる夜の一言には、身にしみて思ふ友ともなりぬべし。大路ゆく辻占うりのこゑ、汽車の笛の遠くひびきたるも、何とはなしに魂あくがる、心地す。

(二葉全集)

横井也有

伊人、名は時般、尾根藩士、天明三年三月三

横井也有

昔者、莊周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也。俄然覺則蘧然周也。(莊子)

古今の序

花になく、鶯水にすむ蛙の聲さけば生きたし生けるものいづれか歌をよまざりける。(古今集序)

古池に

古池や蛙飛びこむ水の音。(芭蕉)

六百 蟲 譜

横井也有

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ、莊周が夢もこのものには託しけぬ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりてとほく聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、このものことさらにもそしりがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるがよきなり。や、日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふことを聞かぬに、このものばかり初蟬といはる、こそ大きな手がらなれ。「やがて死ぬけしきは見えぬ」と、このも

〇……に盡く

〇景物

〇すだく

〇ぞ……覺ゆる

〇貧の學者

〇晋の車胤

〇本意

〇筆蹟

〇ひるがはやどちらの

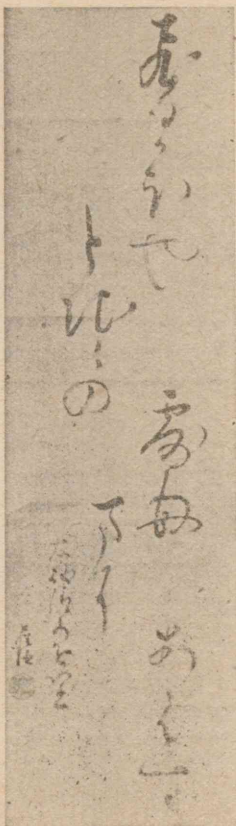
〇露もまにあはず

〇右磯清水を以書

〇蕨隠

のの上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇はたゞこのものの爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに、貧の學者にとられて油火の代りにせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざる



横井也筆蹟

はことの 外の不自 由なり。 俳諧には

その眞似すべからず。

茅蜩は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃鳴くなり。つくつくほふしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。「筑紫の人の旅に死にて、このものになりたり。」

蜀魂

蜀の皇帝が杜鵑と化したといふ故事。

退隱の媒

楚國の襄舍未央宮に宿し大なる蜘蛛の網に蟲のかゝり死せるを見て無常を感じ遂に退隱したといふ故事。

頼光

源満仲の子、土蜘蛛退治の傳説がある。かひくし

〇不物ずき

と、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蜘蛛はたくみに網を結んで、ひそまつて物を害せんとす。もろこしの昔には、退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていと憎し。古代朝敵の初として頼光をさへ脅かしたる、いとおそろし。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるは、聊かあはれ添ふるをりもあらんか。彼はかひくし、く巢作りてこそあれ、東海道に散りほひたる宿なしものをば、くもとはいかていふやらん。

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲はたがために身を焦すや、蜉蝣ははかなきためしに引かれ、蓼くふ蟲は不物ずきの謗となれり。おなじ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、こがね蟲はいやし。

狗の齒に噛まるゝ蚤はたま〜にして、猿の手に探らるゝ虱は逃るゝこと難かるべし。

蝸牛はたゞ水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらん。家はもちたれども、行く先々を負ひ歩くは、水雲の安きにも似ず。

蛇・蚯蚓の足なくとも歩むべくば、蜈蚣をさ蟲の數多きは不用のことなり。蟪蛄の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心い

かつなり。人の上にもこのたぐひはあるべし。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を駕籠に

乗りて、富士を眺め行く人には似たり。

促織・鈴蟲・蠻蟲はその音の似たるを以て名によべり。松蟲の

その木にもよらぬに、いかでかく名をつけたるならん。毛生ひ

むくつけき蟲にもおなじ名ありて、松を枯し人にうとまる。ひ

とつ在處に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生

○水雲

○さかつ

原・吉原  
静岡縣駿東郡原、同縣富士郡吉原、ともに東海道五十三次の一。

○むくつけし  
○うとむ  
○後生  
○殺生

つゞりさせ  
秋風に綻びぬらし藤  
袴つゞりさせてふき  
りざりすなく。  
(古今集)  
われからと  
あまの別る藻にすむ  
蟲のわれからと音を  
こそなかも世をば怨  
みじ。(古今集)

○端居

○かつは

○風雅  
七賢  
晋の嵇康・阮籍・山  
濤・向秀・劉伶・阮  
咸・王戎。

鶉衣  
横井也右の俳文集、  
十四卷。

をこととす。これ松蟲のたぐひなるべし。

蟋蟀のつゞりさせとは、人のために夜寒を教ふるなり。藻に

住む蟲はわれからとたゞ身の上を歎くらんを、蠻蟲のちゝよと

呼ぶはいとやさしげなり。されど父のみ戀ひて、なかは母を

慕はざるらん。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃、端居珍しき夕、はじ

めてほのかに聞きたる、または長月の頃、力なく残りたるは、寂し

きかたもあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊やり焼く里の煙など、

かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七

賢の夜はなしには、いかに團扇の隙なかりけん。

(鶉衣)

七年賀狀二篇

網島梁川  
思想家、倫理學者、  
名は榮一郎、岡山縣  
の人、明治四十年歿  
年三十五。

網島梁川

一  
えりね晴れそ雀のよぶたは

古人の一句をうとそ  
新年はめでた  
めでたえ申納め候  
新年と申す  
よめいと何となく  
候  
今年とどうしの二倍  
の新元氣を  
得たきよめに候  
その後體ハ異狀

○異狀

これ無え幸に風もひ  
うさあ  
なり下されし候

二

下田歌子

さうのびる物日も曇り  
るさ  
の是をい全家様  
は揃ひ遊ぶ  
まれの  
どつと迎へさせり  
候は事門の小  
松の子代かけ  
せめでうと祝ひ申  
上候次に此方  
づれも恙なく  
年  
是れ候ま  
憚をづら  
あこ  
う思

下田歌子  
教育家、國文學者、  
岐阜縣の人、昭和十  
一年歿、年八十一。

○門の小松の千代  
かけて

召下された候事向ふ今一度  
御尋ねも致し候事  
のども送り迎ふ事繁に  
に打給れ早とも御慶と相  
成り候まつけても今更に流る月  
日のよどみなきに打驚うれ申し候  
何れの内記びかたぐ御伺ひ申上  
交と為す候事主人事子供  
等引まつれて熱海方面一轉地静養

○轉地療養

○略儀ながら

致し候事留守守ら身代雜  
事に追われ居り御事始にも早々  
御伺ひ候事と存候間異儀  
なごら奉の物めの御祝詞にて聞  
え上げ系ら候此の品ぞら  
うらみ候事昨日主人の許より  
送り候事御事至れやまで  
と内覧に入れ候事ほその内参  
堂の上と見候のみ

○御年玉

八花月草紙抄

松平定信

松平定信  
磐城國白河の城主、  
幕府の老中、文政十  
二年二月に歿、年七  
十二。  
花月草紙  
松平定信の隨筆集。

一 なしと聞けば

なしと聞けばありといはまほしく、悪しといふをば善しとこ  
とかへていはんこそ、いとねぢけたることなれ。櫻てふ花は我  
が國のものなるを、唐國にもありとて、さま／＼例など引きつく  
れど、櫻書いたるもろこしの畫もなく、かなへりと思ふからうた  
もなければ、なしとこそいふべけれ。

いでや、櫻といはでしも、花とだにいへば、こと木には紛れぬも  
のを、ほの／＼と明けゆく山際、雲か雪かとばかり咲き満ちたる  
も、霞こめたる夕まぐれ、花のけはひもおぼろに見えて、こゝにの  
み暮れのこす景色などいふは浅かりけり。まいて、うてなの  
びやかなれば、近劣りするなどいふは、かのことかへて、ざえ負ふ

○ことかへて

○かなふ

いはでしも

○けはひ

○ざえ負ふ心

○めかる

○こちたし

○さるを

筆蹟

さよかぜにしばしお  
くれてちる音はそら  
にたゞよふこのはな  
るらむ。  
樂翁

○けり

○雪螢をあつむ

○うとし



松平定信筆蹟

らんやうに言葉添ふるは、未だ深くそめし心にはあらざりけり。  
すべて言葉もていひつくさんと、思ふは、いと浅き心かな。

二 かの人の

かの人は雪螢あつめし窓に年をつみて、ふみ見る道に心をつ  
くし侍るなり。されば、世の中のことには、いとく侍りとい

○まねぶ

五つの常  
仁義禮智信。  
五つの道  
君臣・父子・夫婦・  
長幼・朋友の道。

○さとし

○きざし

○くさく

○おろそか

くし

孔子のこと。

六十六云々  
吾十有五而志<sub>ニ</sub>于<sub>シ</sub>學、  
三十而立、四十而不<sub>レ</sub>  
惑、五十而知<sub>ニ</sub>天命、  
六十而耳順、七十而  
從<sub>ニ</sub>心所<sub>レ</sub>欲<sub>ス</sub>不<sub>レ</sub>踰<sub>ル</sub>矩。  
○ほりする心 (論語)

へば、さるこそまことの道まねぶ人なりけれと、ほめものするものありとや。もとより道まねぶものは、五つの常五つの道よりして、人ををさめ己ををさむる道まねぶより外のことはなし。されば、世のことにさとく、今のあたりのみかは、千年の先の世のこと、見ぬもろこしの昔今のさまより、さかり衰ふるきざし、人のこゝろの上より、仕ふる道のくさくに至るまで、明らかなるこそ道まねぶ人とはいふべけれ。この世のことに、おろそかにては、いかで道まねぶ人とはいふべからん。

三 わが誠より

わが誠よりつらぬき出づれば、見ざることも見え、聞かざることも聞ゆめりといふは、いと至りしことにて、それをば、かのくしの君も、「六十にして耳順ふ」とものたまへりしぞかし。さるに、いさゝかもほりする心あれば、誠をおほふにぞ、その境にいた

○たへなる奥意

悔い。

○またなく

ることなき。弓射る道を得て、そのたへなる奥意得しものは、弓には誠のはしをも得べし。弓に得きとて、それをもて馬に乗るべしと思ふべけんや。皆道知らぬより、たやすからぬことをたやすきやうにいふか。

四 傍よりいふことは

傍よりいふことは、いとよくあたるものなり。「かの人は衰へたまひき」といへど、鏡見てもさは思はず。「かれは今かくすれど、後には悔い思ふべし。」などいへど知らざるものぞかし。私の心だになくば、傍にて見ると同じかるべし。

五 四つの時

四つの時のうつり行く景色こそ、またなくをかしきを、咲かざるをりの花を咲かせんとし、散るころに散らさじと思ふはいとくるし。散ればまた來ん年は咲きぬべし。いかに心をくるし



○よそ

むとも、霜白く氷堅きをりに、はちすの咲くべきことわりなし。されど、咲くを待ち散るを惜しむは道なり。散るをもよそにして心とせぬは、道しらぬ心なるべし。

六道路は

「道路は足底の廣さだにあらば歩むべし。」といふは、例のことわりのみなり。いかで歩むべからん。梁の上を歩まば落ちぬべし。こは、かの顔氏のいひたる、餘地なきなり。あまりに事に甚しく物にせちならば、行はれぬのみか、うとまれぬべし。こは事物に對して餘地なきなりと聞きぬ。

七 やんごとなき人

やんごとなき人、にはかにいたづきにかゝれり。たやすからぬさまなりければ、「今このくすし一人に任せんもいかゞなり。かれもくすしの道にはよのつねならねば、これと心を合はせて

顔氏云々

人足所履、不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>數寸、然而咫尺之途、必顛<sub>二</sub>蹠<sub>一</sub>於崖岸、拱抱之梁、每沈<sub>二</sub>溺<sub>一</sub>於川谷、者何哉、爲<sub>二</sub>其傍無<sub>二</sub>餘地<sub>一</sub>故也。(顔氏家訓)

○せち  
○やんごとなし  
○いたづき  
○くすし  
○よのつね

○いで來  
○てけり

桀紂

夏の桀王、殷の紂王、ともに非道の君であつた。

○なだむ

堯舜

支那太古の帝、五帝の内、帝堯、帝舜、共に仁君であつた。

○ぶかし

「薬調ぜよ。」といへば、はじめのくすしかうべを振りて、「さらばそのよのつねならぬものに任せ給へ。かゝるとみのいたづきを療治せん、人をかたらひてはいかていで來べき。」といひければ、げにもとて、はじめのに任せてければ、そのいたづきも速かにおこたりぬ。

八 わが悪しきをば

わが悪しきをば桀紂をひきてなだめ、人の善きをば堯舜を引き出でてとがむ。「かれはかゝる悪しきことなしぬ。」といへば、「げにさあらん。」といふ。「このものかく善きことし侍りぬ。」といへば、「いかゞあらん。いぶかし。」といふ。「げにも人は悪しき心あるものかな。」といへば、「善き名得まほしと思ふがゆゑに、人の悪しきにてわが心をなだめ、人の善きをば嫉むより出てくるなり。」といひき。

九條武子  
歌人、京都の人、昭和三年歿、年四十二。

九無憂華

九條武子

一女の涙

○客觀の世界

女の涙はうつくしい。それは冷たい客觀の世界から離れた、きはみなき愛の泉からしたゞりくる純情の一しづくである。

○陷穽

しかし多くの女子は、これをみづからの遊戯として弄ばうとする。そしていはゆる涙の征服が、遂に涙の陷穽となることに心づかない。かくて世に、不良の兒を救ひあげた慈母の尊き涙よりも、みづからを詐つた巧みな涙が多いのは悲しいことである。

○詐る

○つゝまじし

女は涙そのものを卑しむべきものにしてはならない。むしろ涙によつて象徴される、つゝまじき純情の、男子よりも多分にめぐまれてゐることを讚美しよう。それはまた、涙によつて生

○生きることの辱しめ

きることの辱しめを償ふ所以であると思ふ。

二 久遠の瞬間

ローマのルインは、七つの丘に空しき梯を留めてゐる。ボン

ローマのルイン  
伊太利の古都ローマの廢墟。  
ボンベイ  
ペスピヤス火山の麓にあつた町であるが、その噴火の爲に埋没されてしまつた。  
○終焉  
○悠久



九條武子

ベイの最後は地上の歴史の終焉を示してゐるかのやうである。悠久なる自然の生命に比較する時、人間の歴史の如何に短く、また如何にはかなきか。しかもその

○渺たり

短きペーヂの、渺たる粟粒に似た、我等は一の存在に過ぎない。

しかし如何に小さな存在であつても、われらは疑ふこともなき確かな存在であるところに、一瞬の生命のいよゝゝ尊きこと

○永遠の生命

が知られる。永遠の生命の獲得を、この一瞬の間にのがしてはならない。われらの歎は、短き命をもつてゐることにあるのではなく、瞬間の生命をよく生かし得ないところに在る。

三 巖のかげに

丘を登りつめるところ、巖のかげに、小さな花が可憐な頭を擡げて、むらがり咲いてゐた。春の歩みが、此處までも押寄せて來てゐることが考へられる。

○壯麗

春は壯麗な花園のなかにのみ飾られるのではない。むしろ一輪の小さな花によつて、忘れられた巖のかげにも、また春のよろこびが充ちてゐるのであつた。

しばらくも倦むことのない、自然の働を見のがしてはならない。みづからの營みを、丹念にたちつゞけるものは、如何なる境涯に在つても健かに生きることができる。そして、みづから

○丹念

○働の法悦

生きるもののにのみ、働の法悦がめぐまれる。

四 跪く心

神のすがたに對し、たゞしは山に對し、高空の陽に對しても、心から跪くころに、何のいつはりもない。その對象のどういふものであるにせよ、全我をさゝげてひざまづき得る心の感激をもつものは幸福である。

うつくしい信の世界には、懷疑もなければ恐怖もない。あらゆる虚飾から放たれた合掌のすがたは、また感謝のすがたそのものである。感謝される心持は、信ずるもののみが知る法悦の世界である。

何人も、詐のない世界に住みたいとおもふ。いつはりの多い世の中であるそれだけ、信じ合ふ世界にあこがれる。しかも、ともに信じ合ふ世界は、人々が互の、合掌される感謝の心持によつ

- 對象
- 全我
- 懷疑
- 虚飾

○異郷

異郷に在つて、故郷の訛を聞いたときは、未知の人にさへも、なにか聲をかけたくなる。故郷のもつ強い感激は、それほどわれらの心を抱擁してゐる。

○何の奇もない

何の奇もない山にも水にも、われらの祖先がこの土に育ち、この土に働いてきたことを思へば、何かしらず生命のこもつた、なつかしさ、安らかさが感じられる。

○候鳥

候鳥のさすらひに似た生活を送つてゐる人々でさへも、おのが還るべき故郷の土を忘れ得ない。何人も慕はしき心地をもつて故郷の土に還つてゆく。

安らかに土に還つてゆく感激は、なつかしき母のふところに眠らうとする願そのものである。

○沁々とした心

私たちは、せめて與へられた一日の糧の前に坐つたときだけでも、沁々とした心をもつて、箸をとり上げたいとおもふ。祖聖が一尾の魚に對してさへ、念佛してむくいられた心もちも、おのづから窺はれる。

○法縁

一碗の飯も、粒々みな法縁の辛勞からさゝげられたものであることを思へば、合掌せずにはをられない親しさ、涙ぐまじさが感じられる。

○讚仰

私たちは、天の恵と地の福と、そして人の働とを讚仰しよう。恵をたえずもとめてやまぬは、可憐らしいことである。しかし、常々な日々のいとなみのなかにも、與へられてあるゆたかな恵を見のがしてゐるのは、寂しいことである。

○常凡

七 運命に克つ

六 糧のまへに

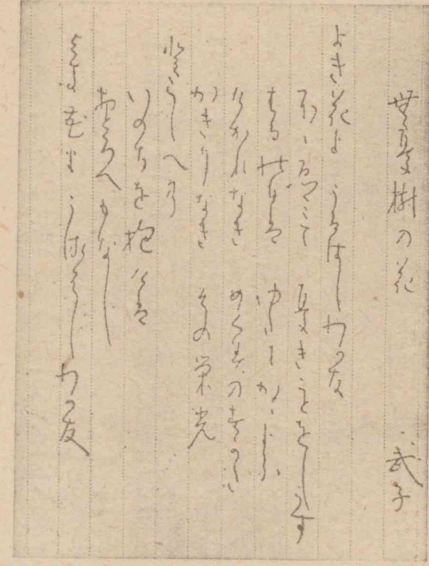
○貧窮の裡に喘ぐ  
こかこつ

筆蹟

無愛樹の花 武子  
よき花よ  
うるはしわが友  
ほろろみて  
憂きことをしらす  
はるの日は  
ゆたにかよふ  
けがれなき  
めぐみ すがた  
かぎりなき  
その榮光  
こしへの  
いのち抱けば  
おとろへもなし  
よき花よ  
うるはしわが友

○絶望に徹する

正しき道を歩む者、必ずしも富めるものではない。しかし、貧窮の裡に喘ぎながらも、良きをしへのまゝに生きる。をしへをもとめながら、ともすれば身の不幸をかこつものは、幸福をもとめるために、をしへを弄ぶものではあるまいか。



九條武子筆蹟

むしろ貧窮に徹したとき、絶望に徹したとき、まことの道はそこに展げ、まことの力はそこに燃え出て来よう。

をしへの中にすむ。をしへのまゝに生きるものこそ、如何なる運命の戯にも、之に打克つものであらう。

八 滅びざる仕事

生命を打ちこんだ自分の仕事をもつてゐる人には、その仕事のどんな種類であるにかゝはらず、何人も尊敬せずにはをられない。たとへその一生に成し遂げ得ずとも、永遠にほろびることのない生命が、そこに見出される。

私たちは、ゆるされた短い生命を惜しまねばならぬ。しかし多くの人たちは、單に限られた生命の延長のみをねがひ、限りなき生命を育むことを忘れがちである。千古のをしへを垂れたいにしへの聖者たちや、藝道の上に不滅の光を放つた古人の努力をみるにつけても、短い生命を育てあげることの尊さが感じられる。

自分の生命を打ちこむことの出来る仕事をもつてゐるものは幸福である。そこに如何なる苦難が押寄せようとも、たえざ

○生命を打ちこむ

○短い生命を惜しむ

○千古のをしへ

る感謝と新しき力のもとに生きてゆくことが出来る。  
生命は仕事と共に不滅である。

九 眠に入るとき

その日の仕事を了へて、眠に就かうとするとき、しづかに一日中の自分を回想してみる。一日のいとなみに疲れた自分をもう一度呼びかへしてみる。それは涙ぐましいほど懐かしいものである。

何の思ひわづらふこともなく、眠に就くときは嬉しい。快き回想の裡にも、ともすれば、暗い影にをのゝく自分を見出すときは、かぎりなき寂しさに襲はれずにはをられぬ。

自分をしみじみと省みることは、度ましく生きる合掌である。私たちは、絶えざる懺悔を通して、丹念に生活して行きたい。そして何の憂もなく、平安な眠に入りたいとおもふ。 (無憂華)

○回想する

○思ひわづらふ

○そののく

○懺悔

一〇 女子と平假名

吉澤義則

平假名は、草假名といつてゐた時代もあるが、最初は女手と呼ばれてゐた。女手とは女文字といふことで、この文字が主として女子に用ひられてゐたからの名稱であつたものと考へられる。

我が祖先は神代の昔から、好んで和歌を詠んでゐたのであるが、支那に於ける詩文尊重の風潮に刺戟せられて後は、更に一層の流行を見るに至り、遂に萬葉時代を現出せしめ、萬葉集を貽すまでになつたのである。しかるに、雨露となり肥料となつて、一時は和歌を成長せしめた詩文も、いつしか和歌を衰へしめる黴菌とかはつてゐた。

都は奈良から京に遷つたが、桓武天皇の御代には、まだ和歌の

吉澤義則  
國文學者、文學博士、  
京都帝國大學名譽教  
授、京都府の人、明  
治九年生。

○風潮

○現出する

○徵候

○よしや

○詠歌

○さながらに

衰微した徵候は見えないやうである。平城天皇の御代にもよしや萬葉時代にあつたやうな潑刺たる生氣は見られなかつたにせよ、詠歌の餘風はさながらに存續してゐたと考へてよいであらう。

○ひそめる

○好尚

ところが嵯峨天皇の御代を経て淳和天皇の御代になると、文藝の世界は詩文の獨舞臺となつて、和歌は公會の席から全くその影をひそめてしまつたのである。吾人はこの時代を國風暗黒時代と呼んでゐる。つまり世人の好尚が和歌を去つて詩文に趨いたのである。けれども、婦人はさうした好尚の潮流に乗つて行くことが出来なかつた。それは、婦人に漢學の素養がなかつたからである。紫式部日記に見えてゐる一挿話は、この間の消息を如實に物語つてゐると思ふ。

紫式部は若うして夫藤原宣孝に死にわかれた。そのころの

紫式部日記

紫式部が上東門院にお仕へしてゐる當時の見聞感想を記した日記、二卷。

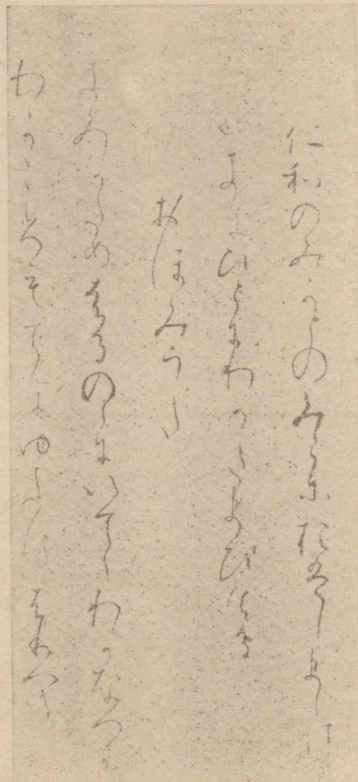
○如實に

○追憶

紀貫之筆蹟

仁和のみかどのみよにおはしましけるるときにひとにわかたまひけるおほみうたきみがためはるののいにてわかつなむわがころもでにゆきはふりつつ

ことであるが、一日宣孝の書齋に入つて、その遺書を繕いてゐた。蓋し獨りしづかに有りし世の追憶に耽つてゐたのであらう。それを見た侍女達は、一貴女は、そのやうに漢籍などを讀まうと



貫之之筆蹟

遊ばすか  
ら、不幸を  
お招きに  
なるので  
ございま  
す。昔は

○追憶

御經を見るのさへ、御婦人は爲さらなかつたものでございます。と忠告したと、その日記に記されてある。佛典が漢文で書かれてあるといふ理由で、現當二世安樂の爲であつてさへ、それを讀むのは忌まれたといふことである。固より、光明皇后の如き、有

有智子内親王  
醍醐天皇の皇女、承和十四年(五〇七)薨、御年四十一。

枕冊子

清少納言の隨筆。

琴

七絃のこと。

藤原師尹

忠平の第五子、安和二年(二〇九)薨、年五十一。

○素養

○時の流に棹さす

智子内親王の如き漢學に通じた一二の方々がなかつたではない。現に紫式部の如きもその一人であつた。がそれは稀な例外であるに過ぎなかつた。實際當時の女子教育には漢學は含まれてゐなかつたやうである。王朝時代のことではあるが、枕冊子が傳へてゐる女子教育を見ると、「一には御手を習ひ給へ、次には琴の御ことをいかで人に弾きまさんとおぼせ、さて古今の歌二十卷を皆うかべさせ給はんを御學問にはせさせ給へ」とある。これは藤原師尹がその女子教育に用ひた方針であつたが、これを一般に推し及しても大きな間違ひは無からうし、またこれによつて上代の女子教育を想像して見ても、差支はなからうと思ふ。

漢學の素養を持ちあはせなかつた女子は時の流に棹さして男子と好尚を同じくすることは出来なかつた。すなはち、詩文

○賞玩

○交際場裡  
○時好

○腦漿をしぼる

○因縁づけられる

記紀

古事記と日本書紀。

○腐心する

の隆盛をよそに見ながら、女子は依然として和歌の賞玩にとちこもつてゐた。又さう爲さざるを得なかつたのである。男子も、女子と交渉を持つ世界に於いては、餘儀なく和歌を詠みもしたけれども、さうでない交際場裡に於いては、時好を追うて、詩文の製作に腦漿をしぼつてゐたのである。かくて、男子の用ひる文字は漢字であつた。また、さうでない日常の記録にも、男子は必ず漢字を用ひるものと因縁づけられてゐたのであつた。それゆゑ古くは漢字を男手或は男文字といつてゐたのである。和歌を寫す文字の假名であることはいふまでもあるまい。勿論漢字も交ぜて書いてないではないが、その主要文字が假名であつたことは、記紀萬葉集などを一見すれば、多くをいふ必要はなからうとおもふ。

男子が詩文に腐心し漢字を筆にしてゐた間に、女子は和歌に



○煩瑣に堪へない

○頻用する

○省略

○稱揚する

○省筆

○掣肘

○麒麟兒

精進し假名を用ひてゐたのである。假名も初はもとより眞草ともに漢字そのまゝの形態を承けついで萬葉假名であつたが、それは點畫が餘りにも複雑で常用するには煩瑣に堪へなかつたであらう。て頻用してゐる中に、筆は知らずく省略へくと歩いて來たのであつた。かうして草書はいつとなく平假名にまで發達して、遂に支那人も、それを漢字草體から生まれたものとも氣附かず、日本の國字として稱揚するまでになつてしまつたのである。草書をこゝまで發達せしめるには、女子に漢字の知識が乏しかつたといふ事が、與つて力あつたものとおもはれる。若し女子に漢字の知識が豊かであつたならば、省筆の際にも常にその知識に掣肘せられて、あれほど大膽な略體を創出することは出来なかつたであらう。されば、この便利な平假名は、いはば不具な女子教育が生み出した貴い麒麟兒であつて、

○皮肉な氣まぐれ

○はぐくむ

これが男女共學であつたならば、男女同等の教育を受けてゐたならばとおもふと、皮肉な自然の氣まぐれを感じないではゐられない。

○展開  
○王朝文學  
○永劫  
○燦然たる光芒

○讚嘆する

所謂國風闇黒時代がかうした偉大な製作品をはぐくんでゐようとは誰も氣附かなかつた。恐らくは作者自身もそれとは氣附かなかつたであらう。清和天皇頃になつて國民精神は目ざめた。目ざめた國民精神は、先づ國語に呼びかけた。和歌は復興された。物語文學は展開された。かくて、絢爛たる王朝文學は、千年後の今日までも、否、永劫に燦然たる光芒を投げつけらるであらう。而して、若し便利な平假名が發達してゐなかつたならば、短い形の和歌はともかくも、あの千古の傑作である源氏物語のやうな長篇は終に現れないで了つたであらうことを思ふと、平假名の功績を讚嘆せざるにゐられないではないか。

○愛撫する

なほ終に臨んで一言しなければならぬことは國風闇黒時代に於いて女子が國語を愛撫した事實である。男子が詩文に夢中になつてゐた間にも、女子は和歌と消息とによつて、國語を愛撫しつゝけてゐた。如何に平假名が生まれてゐても、洗煉された國語の準備がなかつたならば、一朝にして、物語文學の出現を見ることは困難であつたであらう。それが、女子のひたむきな愛撫の力によつて、十二分に用意せられてゐた。この國語の愛撫は、假名の使用を伴はなければならず、即ち平假名成育の搖籃でもあつたわけである。これらは、すべて計畫的なものでもなく、意識的なものでもなかつたと思ふ。けれどもこれをその効果の上から觀て、日本の女子が國家に盡くし、同胞に盡くした貢獻中最も偉大なる業績として、絶大の讚辭をさゝげて然るべきものと、固く信ずるのである。

○ひたむき

○搖籃

○讚辭

一一 正行の母

○舊好  
○不便

その後、尊氏卿楠木が首を召されて、「朝家私日久しく相馴れし舊好のほども不便なり。跡の妻子ども、今一度空しき貌をもさこそ見たく思ふらめ。」とて、遺跡へ送られける情のほどこそ有難けれ。

○後室

楠木が後室子息正行これを見て、判官今度兵庫へ立ちし時、さまざま申しおきしことも多かる上、今度の合戦に必ず討死すべしとて正行をとゞめおきしかば、出でしを限りの別なりとは、かねてより思ひまうけたることなれども、貌を見ればそれながら、目塞がり色變じて、かはりはてたる首を見るに、悲しみの心胸に満ちて、歎きの涙せきあへず。  
今年十一歳になりける帶刀、父が首の生きたりし時にも似ぬ

○持佛堂

有様、母が歎きのせん方もなげなるさまを見て、流るゝ涙を袖に抑へて持佛堂の方へ行きけるを、母怪しく思ひて、則ち妻戸の方より行き見て見れば、父が兵庫へ向かふ時、形見にとゞめし菊水の刀を右の手に抜き持ちて、袴の腰を押下げて、自害をせんとぞしたりける。

○梅檀

母急ぎ走り寄つて、正行が小腕に取りついて、涙を流して申しけるは、『梅檀は二葉より芳し。』といへり。汝幼くとも父が子ならば、これほどの理に迷ふべしや。小心こころにもよく、事のさまを思つてみよかし。故判官が兵庫へ向かはれし時、汝を櫻井の宿より返しとゞめしことは、全く跡を弔はれんためにあらず、腹を切れとて残しおきしにもあらず。『我たとひ運命盡きて戰場に命を失ふとも、君いづくにも御座ありと承らば、死に残りたらん一族若黨どもをも扶持しおき、今一度軍を起し、御敵を滅し

○扶持す

○具さに

て、君の御心を安んじまらせよ。』といひおきしところなり。その遺言具さに聞きて、我にも語りし者が、いつのほどに忘れけるぞや。かくては父が名を失ひはて、君の御用に合ひまらせんことあるべしとも覺えず。と泣くく、諫めとゞめて、抜きたる刀を奪ひ取れば、正行腹を切り得ず、禮盤の上より泣き倒れ、母と共にぞ歎きける。

○心に染み、肝に銘す

その後よりは、正行、父の遺言、母の教訓、心に染み、肝に銘じつゝ、或時は子どもをうち倒し、首を取る眞似をして、「これは朝敵の首を取るなり。」といひ、或時は竹馬に鞭を當て、「これは將軍を追ひかけ奉る。」などいひて、はかなき手すさびに至るまでも、ただこの事をのみ業とせる心の中こそ恐しけれ。

○はかなき手すさび

(本 平 記)

一二 いざよふ月

阿 佛 尼

阿佛尼  
藤原爲家の後室、爲相等の母、弘安六年(二四三)歿。  
かべの中云々

魯恭王使<sup>ミ</sup>人<sup>ミ</sup>壞<sup>ミ</sup>夫子講堂、於<sup>テ</sup>壁中<sup>ニ</sup>石函<sup>ニ</sup>得<sup>ル</sup>古文孝經二十二章。古文孝經孔安國序。

けりな  
みづぐきの  
かすならず

すさび

昔かべの中よりもとめ出でたりけん書の名をば、今の世の人の子は夢ばかりも身の上のこととは知らざりけりな。みづぐきの岡のくず葉、かへすくも書き置く跡たしかなれども、かひなきものは親のいさめなり。

又賢王の人をすてたまはぬまつりごとにも漏れ、忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるゝものは、かずならぬ身ひとつなりけりと思ひ知りながら、又さてしもあらで、なほこのうれへこそ、やるかたなく悲しけれ。

更に思ひつゞくれれば、やまと歌の道はたゞまことすくなく、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらん。ひのもとの國に、あまの岩窟ひらけし時、よもの神だちのかぐらのことばをはじめ

物をやはらぐ  
男女の中をも和げ、猛きものゝふの心をなぐさむるは歌なり。(古今集序)

二度勅をうけて  
新家撰  
新古今集、新勅撰集。

爲家撰  
續後撰集、續古今集。

ありがたし  
二人  
爲相・爲守。

のりのともし火

ものから

つれなし  
子を思ふ心のやみ  
人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな  
(後撰集)

て世を治め、物をやはらぐるなかだちとなりにけるとぞ、この道のひじりたちは記しおかれたりける。

さて又、集を撰ぶ人はためしおほかれど、二度勅をうけて代に聞えあげたるは、たぐひなほありがたくやありけん。そのあとにしもたづさはりて、二人の男の兒どもも、ちの歌のふる

ほぐどもを、いかなる縁かありけん、預りもたることあれど、道をたすけよ、子をはぐくめ、後の世を弔へとて、深きちぎりをむすび

おかれし細川のながれも、故なく塞きとめられしかば、あと弔ふのりのともし火も、道を守り、家をたすけん親子のいのちも、もろ

ともにきえをあらそふ年月を経て、危く心細きものから、何としてつれなくけふまではながらふらん。

惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひすつれども、子を思ふ心のやみは、なほしのびがたく、道をかへりみるうらみは、やらんかた

○かめの鏡  
○せめて  
○ゆくりなく  
○いざよふ月  
ぞ……ぬる

さだめなき  
神無月ふりみふらす  
みさだめなき時雨ぞ  
冬の初なりける。  
(後撰集)

○きほふ

人やりならぬ  
人やりの旅ならなく  
に大方はいきうしと  
いひていき歸りこ  
ん。  
(古今集)

なく、さてもなほ、あづまのかめの鏡にうつさば、くもらぬかげも  
やあらはるゝと、せめておもひあまりて、よろづの憚りをわすれ、  
身をえうなきものになしはてて、ゆくりもなくいざよふ月にさ  
そはれ出てなんとぞ思ひ  
なりぬる。



尼 佛 阿

頃ほみ冬たつはじめの  
さだめなき空なれば、降り  
み降らずみ、時雨も絶えず、  
嵐にきほふ木の葉さへ、涙  
と共に亂れ散りつゝ、事に  
觸れて、心細く悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いきうしとて  
も、とゞまるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。  
目かれせざりつるほどだに、あれまさりつる庭も籬も、まして

侍 従  
爲相(十三歳)。  
大 夫  
爲守(十一歳)。  
○あながちに  
○打屈す  
○いひこしらふ  
○草 子  
○おくがき

○あなかしこ

と見まはされて、したはしげなる人々の袖のしづくも、なぐさめ  
かねたる中にも、侍従、大夫などのあながちに打屈したるさま、い  
とこゝろぐるしければ、さまざま、いひこしらへつ。  
代々に書きおかれる歌の草子どものおくがきして、あだな  
らぬかぎりをえりしたゝめて、侍従の方へ送るとて、書きそへた  
る歌、

和歌の浦にかきとゞめたる藻鹽草

これを昔のかたみとも見よ

あなかしこよこ波かくなはま千鳥せんとり相あひま

一方ならぬあとをおもはば

これを見て、侍従のかへりごといと疾く有り。

遂によもあだにはならじ藻鹽草

かたみをみよのあとに残せば

○おとなし  
○心やすし  
○うちしほたる

迷はまし教へざりせばはま千鳥  
一方ならぬ跡をそれとも  
このかへりごと、いとおとなしければ、心やすくあはれなるに  
も、昔の人に聞かせたてまつりたくて、又うちしほたれぬ。  
大夫の、傍さらず馴れきつるを、ふり捨てられなんなごり、あな  
がちに思ひ知りて、手習したるを見れば、

はるく、と行くさき遠く慕はれて

いかにそなたの空を眺めん

とかきつけたる、ものより殊にあはれにて、同じ紙に書き添へつ。

つくく、と空な眺めそこひしくば

道遠くともはやかへり來ん

とぞ慰むる。

山より、侍従の兄の律師もいでたち見んとておはしたり。そ

山  
比叡山。  
侍従の兄  
爲相の兄源承。

ものより殊にあは  
れ  
○な……そ

れもいと心細しと思ひたるを、此の手習どもを見て、書き添へた  
り。

あだにのみ涙はかけじ旅ごろも

心のゆきて立ち歸るほど

とは、言ことば思おもしながら涙のこぼるゝを、荒らかにものいひ紛はすも  
さまざま、あはれなるを、阿闍梨の君は山伏にて、この人々よりは  
兄なり。此のたびの道のしるべに送り奉らんとて、出で立たる  
めるを、この手習に又まじらはざらんやは、とて書き付く。

立添ふぞうれしかりける旅衣

かたみに頼む親のまもりは

女子はあまたもなし。たゞひとりにて、此の近きほどの女院  
にさぶらひたまふ。院の皇女ひとところ生まれたまふばかり  
にて、心づかひも實まことしきさまにて、おとなしくおはすれば、宮の御

女子  
紀の内侍  
女院  
龜山天皇の妃、新陽  
明門院。  
實し

○言思  
阿闍梨の君  
名は慶融。  
○道のしるべ

○はぐくみおほす

方の戀しさも、かねて申しおくついでに、侍従・大夫などのことはぐくみおほすべきよしも、こまかに書きつけて、奥に

君をこそ朝日とたのめふるさとに

残るなでしこ霜に枯すな

と聞えたれば、御かへりもこまやかに、いとあはれにかきて、歌の返しには

思ひおく心とゞめばふるさとの

霜にも枯れじやまとなでしこ

とぞある。

いつゝの子どもの歌、残りなくかきつゞけぬるも、かつはいとをこがましけれど、親の心にはあはれに覺ゆるまゝに書き集めたり。さのみ心弱くてはいかゞとて、つれなくふり捨てつ。

(十六夜日記)

すつゝの子  
紀の内侍、慶融、源承、爲相、爲守。  
○をこがまし  
十六夜日記  
阿佛尼が自分の子供の爲幕府に訴訟をしようとはるばる鎌倉まで下つた、その時の紀行文。

一三 行く川の流

鴨 長明

ゆく川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみにうかぶうたかたは、かつ消えかつむすびて、久しく止ることなし。世の中にある人と住處と、またかくの如し。

玉敷の都の中に棟をならべ、薨を争へる、高き卑しき人のすまひは、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。所もかはらず人も多かれど、いにしへ見し人は二三十人が中に僅かに一人二人なり。朝に死し夕に生まるゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より來りていづ方へか去る。又知らず、かりのやどり誰が爲に心を惱まし、何によりてか

鴨 長明

鎌倉時代の文學僧、建保四年(一一七二)歿、年六十三。

○うたかた

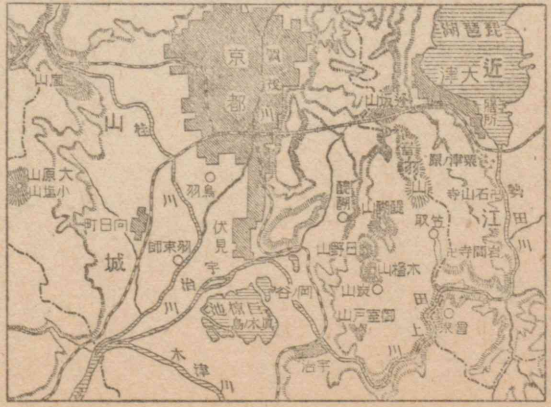
○玉敷の  
○薨を争ふ

○あるは

○朝に死し夕に生まる

○無常を争ふ  
○あるは

目を喜ばしむる。其の主人と住家と無常を争ひ去るさま、いはば朝顔の露に異ならず。あるは露落ちて花残れり。残るといへども、朝日に枯れぬ。あるは花しほみて露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つことなし。こゝに六十の露消えがたに及びて、さらに末葉のやどりを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿を造り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃のすみかにならずらふれば、又百分が一にだも及ばず。とかくいふ程に、齢は年々に傾き、住處は折々に狭し。其の家の有様世の常にも似ず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定め



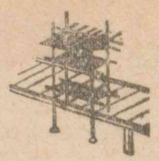
旅人の云々  
亦猶、行人之造、旅宿、老蠶之成、獨繭、矣。其住處時乎。(慶滋保胤、池亭記)  
○なすらふ  
○世の常

○土居

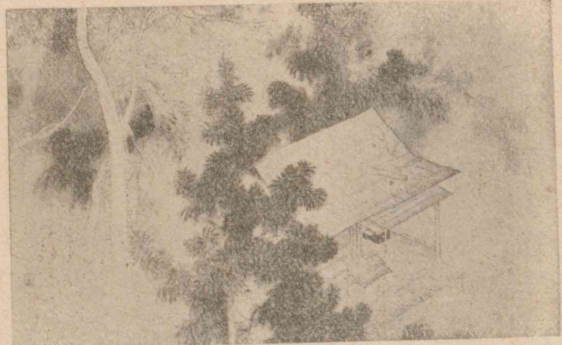
か……ある。

○迹をかくす

○簀子  
○閼伽棚



往生要集  
六卷、源信僧都の著。



(伊藤龍庵筆)

ざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼ぎ目毎に掛がねをかけたなり。もし心に適はぬことあらば、易く外に移さんが爲なり。其の改め造る時幾ばくの煩かある。積む所僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他の用途いらす。いま、日野山の奥に迹をかくして後、南にかりの日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、其の西に閼伽棚を作り、うちには西の垣に沿へて、阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢並びに不動の像を掛けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黒き皮籠三四合を置く。即ち和歌管絃往



抄物

○文机

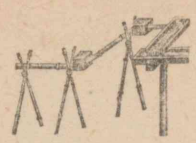
○すびつ

○よすが

○姫垣

○あばら

植ゑ



○観念

○藤浪

○死出の山路

○空蟬の世

生要集如きの抄物を入れたり。傍に箏琵琶おのゝ一張を立つ。いはゆる折箏つぎ琵琶これなり。東に沿へて蕨のほども敷きつかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓を開けて、ここに文机をいだせり。枕のかたにすびつあり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に小地を占めて、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。即ちもろゝの薬草を植ゑたり。假の庵のありさまかくの如し。

其の處のさまをいはば、南に竈あり、岩を疊みて水を溜めたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら迹を埋めり。谷しげけれど西は晴れたり、観念のたより無きにしもあらず。春は藤浪を見る、紫雲の如くにして西の方にほふ。夏は子規を聞く、かたらふ毎に死出の山路を契る。秋は日ぐらしの聲耳に満てり、空蟬の世を悲しむかと聞

○罪障

○つべし

○讀經

○口業

○禁戒

迹の白波

○満沙彌

○源都督

○秋風

○流泉

○あからさま

世の中を何にたとへん朝ぼらけこぎゆく船のあとのしらなみ (拾遺集)  
沙彌滿誓、元正天皇の時の人。  
潯陽の江、潯陽江頭夜送客、楓葉秋花秋瑟々。  
源都督 (白樂天琵琶行)  
桂大納言源經信、琵琶の名手、嘉保元年太宰権帥に貶せられた、都督は太宰帥の唐名。  
秋風、流泉、共に琵琶の名曲。  
○あからさま

ゆ。冬は雪を憐む、つもり消ゆるさま罪障に喩へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとり居れば口業ををさめつべし。必ず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ何につけてか破らん。もし迹の白浪に身を寄するあしたには、岡の屋に行きかふ船を眺めて、満沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉を鳴らす夕には、潯陽の江を想ひやりて、源都督のながれをならふ。若し餘りの興あれば、しばゝ松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を喜ばしめんとにもあらず。ひとり調べひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

大かた此の處に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今

○炎上  
○いくそばく

既に五とせを経たり。假の庵も稍ふる屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苔むせり。おのづから事の便に都を聞けば、此の山に籠り居て後、やんごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。まして其の數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。一度の炎上に亡びたる家又いくそばくぞ。たゞ假の庵のみ、のどけくして恐なし。

○身を知る

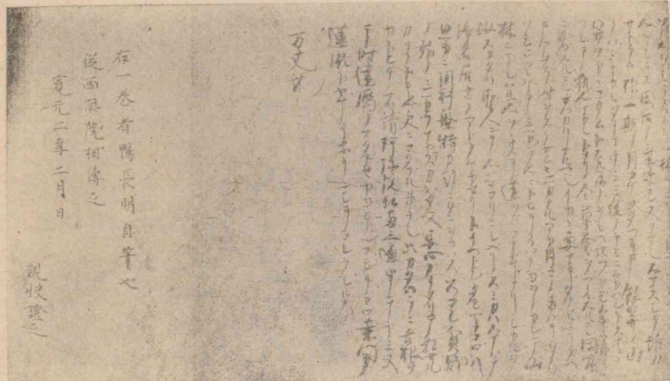
程せばしといへども夜臥す床あり、晝居る座あり、一身を宿すに不足なし。がうなは小さき貝を好む、これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯に居る、即ち人を恐るゝが故なり。われ亦かくの如し。身を知り世を知れば、願はず、まじらはず、ただ静かなるを望とし、愁なきを樂しびとす。

○親昵

總べて世の人の住家を作る習、必ずしも身の爲にせず。或は妻子眷屬の爲に作り、或は親昵朋友の爲に作る。或は主君師匠

○縦ひ

及び財寶・牛馬の爲にさへ是を作る。我、今身の爲に結べり、人の爲に作らず。故如何となれば、今の世



方丈記古寫本

石一巻有傳長明自筆也  
後西院相傳之  
寛元二年二月日  
亂收之

唯我が身を奴とするには如かず。若し爲すべき事あらば、則ち

の習、此の身の有様、伴なふべき人もなく、頼むべき奴もなし。縦ひ廣く作れりとも、誰をか宿し、誰をか据ゑむ。夫れ人の友たるものは、富めるを尊み、懇ろなるを先とす。必ずしも情あるとすなほなるとをば愛せず。只絲竹花月を友とせむには如かじ。人の奴たる者は、賞罰甚だしきを願み、恩の厚きを重くす。更にはぐくみあはれぶといへども、安く静かなるをば願はず。

○絲竹・花月  
○如かじ

○たゆかり

己か身を使ふ。たゆからずしもあらねど、人を従へ、人を顧みるよりは安し。若しありくべき事あらば、自ら歩む。苦しと雖も、馬鞍・牛車と心をなやますには如かず。今一身を分ちて二の用を爲す。手の奴、足の乗物、能く我が心に適へり。心また身の苦しみを知れば、苦しむ時は休めつ、まめなる時は使ふ。使ふとても度々過ぎず。物うしとても心を動かす事なし。如何に況んや、常にありき、常に働くは、養生なるべし。何ぞ徒らに休み居らむ。人を悩ますは罪業なり。いかゞ他の力を借るべき。

衣食のたぐひまた同じ。藤の衣麻の衾、得るに隨ひて、ばだへを隠し、野邊のつばな、峯のこのみ、僅かに命をつなぐばかりなり。人に交らざれば、姿を恥づる悔もなし。糧ともしければ、おろそかなれど、なほ味をあまくす。すべてかやうのこと、楽しく富める人に對して云ふにはあらず。只我が身一つにとりて、昔と今

○罪



つばな

○たくらぶ

○三界はたゞ心一つ  
○七珍

とをたくらぶるばかりなり。

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば、牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望なし。今さびしき住居、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出てては、乞食となれる事を恥づといへども、歸りてこゝに居る時は、他の俗塵に著することをあはれぶ。もし人このいへる事を疑はば、魚鳥のありさまを見よ。魚は水にあかず、魚にあらざれば、其の心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざれば、其の心を知らず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まらずして誰かさたらん。

そもく、一期の月影傾きて、餘算山の端に近し。忽ちに三途の闇に向かはん時、何のわざをかかこたんとする。佛の人を教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。今草の庵を愛するをもとがとす。閑寂に著するも障なるべし。いかゞ用

○氣味

○餘算  
○三途の闇

○執心なかれ  
○とが

○あたら

浄名居士  
維摩詰のこと、方一丈の室に起居してゐた。

周梨槃特

釋迦の弟子、魯鈍な者であつたが、釋迦の苦心によつて大悟することが出来たといふ。

○安心

建曆

順徳天皇の御代。

蓮胤

作者鴨長明の法名。

月影は云々

新勅撰和歌集に出て作者源季廣とある。

方丈記

鴨長明の感想集。

なき樂しみをのべて、空しくあたら時を過さん。

しづかなる曉、此のことわりを思ひつゞけて、みづから心に問ひていはく、世を遁れて山林にまじはるは、心をさめて道を行はんが爲なり。然るを汝の姿は聖に似て、心は濁にしめり。住處はすなはち浄名居士の跡をけがせりといへども、保つ所は僅かに周梨槃特が行にだも及ばず。もしこれ貧賤の報のみづからなやますか、はたまた安心の至りてくるはせるか、其の時心に答ふることなし。たゞ傍に舌根をやとひて、不請の念佛兩三遍を申してやみぬ。時に建曆二年三月の晦日ごろ、桑門蓮胤、外山の庵にしてこれを記す。

月影は入る山のはもつらかりき

たえぬ光を見るよしもがな

(方丈記)

村田春海

江戸時代の國學者、江戸の人、文化八年(一四七〇)歿、年六十六。

芳宜園大人

橘千隆、江戸時代の國學者、歌人、文化五年(一四六六)歿、年七十五。

○大人

○奥津城

○たむく

○うなねつく

○かも

○このかみ

縣居

賀茂眞淵の家、江戸の濱町にあつた。

○物まなび

○みはかしのしりへ

○うるはしむ

○おととひ

一四 芳宜園大人を祭る

村田 春海

こゝに文化の五年九月八日、平春海謹みて芳宜園の大人の奥津城の御前に菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを焚きて、うなねつきて申さく、

あはれ悲しきかも。君は吾に十といひて一年のこのかみにおはするなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの齡におはして、吾はまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物まなびに行きかひたる時、あしたに參るとしては君のみはかしのしりへに従ひ、ゆふべに罷るとしては君の御袖のもとに縫りて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならむ。書讀むとては君を師とも尊み、歌作るとしては吾をおととひのつらにぞ教へ給ひける。中頃にして、君は仕への道に暇なくおは

○世のさが  
○かゝづらふ  
○しぞく

筆蹟

くろ木にはあらで袋  
をいたゞくや是もお  
なしく大はらの人  
千かげ

○まめごと  
○あだごと  
○かたみに

○後る

○常なきは人の身  
の習



し、吾は世のさかにかゝづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつ  
るを、君つかへをしぞき給ひて後は、吾も同じちまたに移り住め  
ば、花を尋ぬとてはわれ道しるべを  
なし、月を思ふとては君が舟に相乗  
り、憂き事も共に憂へ、嬉しき節も共  
に喜びて、世にありふるわざのまめ  
ごと、あだごと、かたみに隔てな  
く、心をかはせること今に二十年、そ  
の初めを繰返し數ふれば、相友たる  
こと既に五十とせにぞ餘りける。  
さるを今後奉りて、いつの世にか  
相見む、何れの時にかこととはむ。常なきは人の身の習ひぞと  
知れど、これをいかでか歎かざらむ、かゝるを誰かはよく堪へむ。

加藤千藤筆蹟

○文の林

宋人有耕田者、田  
中有株、兔走觸株、  
折頸而死、因釋其  
耒而守株、冀復  
得兔、兔不可復  
得、而身爲宋國笑。  
(韓非子)

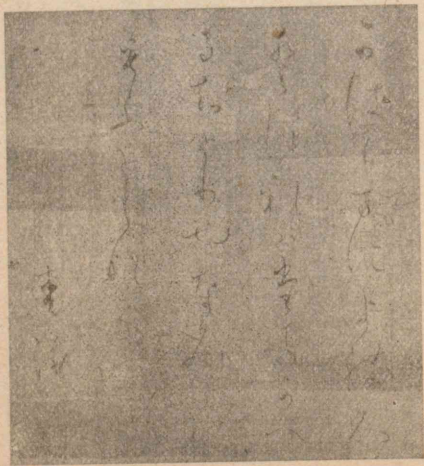
舟にきだつく

楚有涉江者、其劍  
自舟中墜、于水邊  
刻其舟曰、是吾劍  
所從墜也、舟止、  
從其所刻處、入水  
求之、舟已行矣、而  
劍不行、求劍若  
此、不亦惑乎。  
(呂子春秋)

筆蹟

かはしまによるかと  
すればたちかへるち  
どりやなみとおもふ  
どちなる 春海

あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々下  
りゆけるを、賀茂の翁世に出て、今をすてて古に復り、青雲の高  
き心しらひを求め、倭文機の文ある雅びごとを貴みいへれど、く  
ひぜを守り、舟にきだつくる輩、か  
れに泥みこゝにひかれて、なほ怪  
しみとがむる類は多く、たまあひ  
てよくうけひく人なむ稀なりし  
を、君獨り心を起して、普く諭し、廣  
く誘ひしより、近き人は目のあた  
り相うづなひ、遠き人は遙かに靡  
き來て、古ぶりの歌世に盛んになりたるなり。  
その自ら詠みいで給へる歌を見るに、古き調、新しき姿、とりど  
りに備らざるはなし。その古を寫せるは藤原寧樂の御世に及



村田春海筆蹟

藤原  
持統文武兩天皇の御代。

寧樂  
元明天皇より光仁天皇まで七代。

○めでたふとむ

○面おこし

○黄金の聲  
○玉の響

○どち

○言擧げす

○泉の下

琴後集  
村田春海の歌文集、十五卷。

び、後の巧みに倣へるは堀河鳥羽の御時に下らず。心に思ふことは口に盡くさざることなく、目に觸るゝものは言葉に載せざることなむあらざりける。これを見て、たかきもみじかきもめでたふとまざる人なし。又事好みの人は、その名を君に知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君の一首を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ深く喜びける。

しかるを、今黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがどちの歎のみかは、大方の世の人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらむか、るを誰かは慕はざらむ。あはれ悲しきかも。わがかく言擧げするを、泉の下にもさやかに聞召し、天翔りても遙かに見そなはせとなむ申す。

(琴後集)

中島廣足

國學者、號は樞閣、熊本藩の世臣、元治元年(三三三)歿、年七十二。

○そこはかとなく

○ゆくりなく

一五四季小品

一春 雨

中島 廣足

萱ふける軒は、雨の音靜かにて、池水のおやこまやかなるに、いと深う霞める梢より、翅しをれたる鳥どもの、そこはかとなく飛びわたるなど、いといたうをかし。暮れぬれば、ましていとしめやかにて、見る書さへ今ひとときは心しみぬ。風少し吹出でて、燈火のまたゝきたるに、何とも知らぬ花の香の、ほのかにうちかきりたるなどもをかし。花ざかりは更なり、さらでも、柳等青やかにうち煙りうらくと照りたる日は、蘇土筆等いかならむと、野山の様のみゆかしく思ひやられて、庵の中には籠り居難きを、人さへゆくりなく訪ひ來つゝ、近きわたりまでいざゝなどそゝのかすめり。雨の降る日は、さる事も思ひ絶えて、人はた音づれ

○文机  
なむ(ある)

藤井高尙

國學者、備中の人、  
天保十一年(三萬〇)歿  
年七十七。

ますらをの心の句

陳蕃、字仲舉、年十  
五、嘗問處一室、而

庭宇蕪穢。父友薛勤  
來候之、謂蕃曰、

孺子何不洒掃以待  
賓客。蕃曰、大丈夫

處世、當掃除天  
下、安事一室乎。

勸知其有清世志、  
甚奇之。(後漢書、  
陳蕃傳)

○さかしら心

○ふぐし

○物うがる

○まだき

ねば、文机ぶんぐいにのみよりゐたる、なか／＼にをかしうなむ。(橋園文集)

二夏 草

藤井 高尙

庭の面も見えぬばかりに殊更に草を茂らせて、人のあやしみ  
咎めたるに、「丈夫の心は天の下を拂はむとこそ思へ」とかし  
こげに矜りてうちいひたるは、憎き唐人のさかしら心にぞあり  
ける。茂りたるはいと物むづかしければ、時々拂ふこそよけれ。  
されど、五月雨の頃はえしも拂ひあへずかし。霽れ間／＼に庭  
に出でて、ふぐしだつ物して短きをも掘りて籠に入れて、童して  
捨てさせなどするを、はて／＼は物うがりて、欠伸うちして、「え、  
うなき事し給ふものかな。あすあさての程には又もとのごと  
茂りぬべし。」といひて、むづかしげに思ひたる氣色なるもいと  
ほしきに、げに一日二日の程にまたいみじう茂りて、まだきに秋

清水濱臣

國學者、號は泊酒舎、  
江戸の人、文政七年  
(二四八)歿、年四十九。

○しきる

○あな

○みなあらず

伴 蒿蹊

國學者、號は閑田子、  
近江の人、文化三年  
(二四六)歿、年七十四。

○木の芽春雨

○隙行く駒

の野のやうになむなりぬる。よし今は拂はで、この草叢秋まつ  
蟲の棲處にせむと思へば、童がいさめも嬉しうなむ。(松屋文集)

三きぬた

清水 濱 臣

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆ  
むもまたしきる。雁がねのきぬたをさそふにやあらん。きぬ  
たの音の雁がねに通ふにやあらん。あなあやし。あなあやし。  
そもこの音の悲しきか。住む里の寂しきか。打つをりの憂き  
ゆゑか。みなあらず、聞く人の心の寂しきなり。(泊酒舎文集)

四 冬のこゝろ

伴 蒿 蹊

花咲き實なりし木も紅葉を限りに冬がくれ、木の芽春雨も時  
雨に變り、それもいつしか染めぬべきものなくなりぬれば、みぞ  
れに移りて雪と積る。一歳の月日は、隙行く駒のほどもなきか

うなる子

○埋火

ぞ……ありし

少壯云々

少壯幾時兮奈老何

(漢武帝、秋風辭)

前の車云々

前車覆後車戒。(史記)

老いては云々

丈夫爲志、窮當益堅、老當益壯

(後漢書)

○ひたやごもり

な。振分髪のうなる子が大人しくなりぬと言はれしなん、やがて老の始にて、終にひげ髪ひげの白くなりぬるをしもつくろくろと思ひ較べて、埋火の許にのみうづくまるを、若き人々はさこそ見苦しと思ふらめ。我もまたしかぞありし。「少壯いくばく時ぞ、老をいかん。」と詩にも聞ゆるを、徒に朽ちはてぬること、今更に悔ゆるもかひぞなき。前の車の覆るを後の車の戒てふこともあり。我にな倣ひ給ひそよ。冬は歳の餘りともいふを、この頃の雪を集め、長き夜を空しくないね給ひそ、と言はまほし。老いては益、壯なるべしと勇みし人は、己が類にはあらず。たゞ寒きにたへねば、ひたやごもりに籠るほどに、ねぶりは宵より兆して、しかも夜深くは目覺めぬ。冬も憂し。老も憂し。こは老の心を寫すとやいはん、冬の心を寫すとやいはん。

(閑田文草)

金子元臣

國文學者、御歌所寄人、國學院大學教授、静岡縣の人、明治元年生。

○簡勁

○肺腑に入る

○諷刺骨に徹る

○應接に違なし

○寸にして珍

○御慶帳

一六川 柳 點

金子 元 臣

川柳點は實に剃刀の如きか。觸るゝもの皆斷たれ、近づくもの皆傷つく。語句簡勁にして直ちに人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、滑稽頤を解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に、或は奇怪に、千變萬化、人をして應接に違あらざらしむ。時に輕薄にして鄙俚なる調なきにしもあらねど、要するに寸にして珍なるものなり。いで左にその二三を擧げて言ひ試みん。

あがるなといはぬばかりの帳を出し

無筆者、年賀に来て、御慶帳の記名に困り、「さらば來ぬ分にして下され。」といひしこと、昔の笑話に見えたり。今は帳の代りに名刺受を玄關に出す。これも、あがるなといはぬばかりなり。竹の子は盗まれてから番がつき



○後の祭  
○訓誠

よくあることなり。後の祭にもあれ、何にもあれ、番を附くるは附けざるに勝れり。聞きやうによりては諷刺ともなり、訓誠ともなる。

○曲盡す

蘇東坡 宋代の文豪、名は軾、字は子瞻、東坡は其の號、眉山の人。  
○いみじ

おさへれば薄はなせばきりくす

形容の妙を曲盡せり。蘇東坡が「餓蛟取渴虎」と書きしを、いみじき手がらのやうに驚ける人も、もしこの句を見れば何とかいはん。

本降になつて出て行く雨やどり

道灌の「いそがずば濡れざらましを」の歌と一對の巧語。急ぎてもわろし、急がでもわろし。とにかく考へ物なり。

提燈が消えて座頭に手を引かれ

その矛盾がをかしきなり。塙檢校が、「さてく、目あきは不自由な」といひしに似たり。

いそがずば 急がずば濡れざらましを旅人のあとよりはるる野路の村雨。  
(太田道灌)

塙檢校

盲人、國學者、名は保己、文政四年(西暦一八二二)歿、年七十六。

○ヲコト點

片假名に四角な文字は手を引かれ  
漢字に捨假名反點の、左右にうるさく附きたるさま、譬へ得て妙。昔のヲコト點ならんには、「四角な文字に灸をすゑ」といはばいふべし。

手紙には狸、臺には鯉を載せ

手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすらんをかしさよ。近來は、中等教育を終へたる者の文章にも、狐を馬に乗せたる類のこと多し。あながちに、この狸をのみ笑ひ難くや。

名物を食ふが無筆の旅日記

腹のふくる、旅日記かな。食ふより外に能なき人間を罵倒し得て痛快。

泣くくもよい方を取る形見わけ

人情の弱點を穿ち過ぎて、餘りに酷なる心地す。しかし事實

○肝を潰す  
○狐を馬に乗す

○穿つ

○尋常茶飯事

○口吻を弄す

戸隠明神

長野縣戸隠山、手力  
神を祀る。

○所作

○附會す

能因

平安朝の歌人、俗名  
は橋永悦。

○なまじひに

袋草紙

四卷、藤原清輔の著、  
歌學の書。

なるをいかにせん。かの赤穂の城渡しにお金分配を唱へし小  
野九郎大夫はこの露骨なるものか。

かくの如く、川柳點は尋常茶飯の出來事を捉へて、よく滑稽化  
するのみならず、又最も眞面目なるべき故事傳説史實を題目と  
して、縦横自在なる口吻を弄せり。

戸隠も神樂のあひだ髭をぬき

岩戸の細目に開くまでは、用のなき戸隠明神なるを思ふべし。  
鎌にて髭ぬくひま人の所作を神代に附會したる働あり。

御紀行拜見に能因は當惑し

なまじひに名歌を詠みて、苦勞をまうけたりしは能因なり。  
天日に焦して顔だけは黒めたれど、紀行までは手が届かずやあ  
りけん、物にその沙汰なし。作者のつけ目は此處なり。但し袋  
草紙に、「一度においては實か。八十嶋の記を書けり。」とあり。

○けらし

忠盛

姓は平氏、正盛の子、  
清盛の父。

何時も室内旅行家にはあらざりけらし。  
忠盛の高名の場を犬がなめ  
抱きとめたるは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階  
を飛びこして、高名の場を嘗めたりといへる滑稽突梯、容易に及  
び易からず。

その暗さ隼太櫻に衝きあたり

盛衰記、頼政鶴を射る條に、「黒雲とは見たれども、天は實に暗  
し。いづこを射るべしと、矢所さだかならず。」とあり。乃ち郎  
黨隼太が左近の櫻に鼻衝きあてて、まご／＼する一場の喜劇を  
案出し來れるなり。作者はいかなるへうきん者ぞ。

時致は鞭をかじつて息をつぎ

時致が兄祐成の急を救はんとて、途に百姓の駄馬を奪ひて、大  
磯に駆けつけるは、曾我物語中の出色の快譚なり。これを圖に

頼政

姓は源氏、頼光の玄  
孫。

○矢所

○案出す

○へうきん者

時致

曾我五郎、幼名箱王。

○出色

○快譚

○乗力  
源左 佐野源左衛門常世。  
○なづむ

芭蕉 松尾桃青、俳諧正風の始祖、伊賀の人。  
道風 小野氏、日本三蹟の一。

○湊合  
文王 名は昌、武王の父。  
太公望 姓は呂、名は尚、周の王師となる。  
○邂逅  
○胸に一物

して、大根の鞭を添へたるは、畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根を齧らせたるは、この作者の氣轉なり。  
佐野の馬戸塚の坂で二度ころび  
戸塚の坂は鎌倉入の一難所。元來乗力なき源左が瘦馬、さぞや越えなづみしならん。さるを二度まで轉びたりと誇張したるに、大いなる可笑しみを生ず。

芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり  
湊合の妙を見る。主題の蛙をいはて、突然に仕立てたるところに、一種の面白みあるなり。

釣れますかなどと文王そばへ寄り  
流石の聖人文王と、奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには極めて平凡ならざるを得ず。たゞ、「などと」の語、胸に一物ある趣を狀し來りて幾多の波瀾あるを覺ゆ。

藤井乙男

國文學者、俳人、文學博士、京都帝國大學名譽教授、帝國學士院會員、號は夢影、兵庫縣の人、明治元年生。

○賢哲  
○垂訓  
○興業

○知識的道德的遺産

○有史以來

一七 諺

藤井 乙男

格言は賢哲の垂訓にして、俚諺は凡俗の信條なり。前者は明らかにかにその立言者を求め得べく、後者は興業の聲にしてその作者を知るべからず。隨うて、その發生の時期を精確に定めん事頗る難しと雖も、多數の俚諺中には、間々その發生の時期、前後新古の關係、變遷等を推測するを得べきものなきにしもあらず。

吾人が日常使用する多數の諺は、吾人の祖先より智識的道德的遺産の一部分として繼承せるものにて、吾人が新に製作したるものにあらず。有史以來、世々の人類が、内外諸種の天然人事に遭遇し、物に觸れ事に感じ、或は觀察し、或は考慮し、或は感激し、喜怒哀樂種々雜多の經驗を積み、人生に普通なる智識を感得して、後世子孫に遺せる者、これ即ち、今日行はるゝ諺の多數なり。

○非運

○率先者

アリストテレス

希臘の哲學者。(西曆紀元前三三四—三二三)

ツレンチ

愛蘭の宗教家、言語學者で詩に巧みであつた。(西曆一七七一—一七八六)

枕冊子  
清少納言の隨筆。  
土佐日記  
紀實之が土佐から任滿して歸京した時の海路の紀行。

「手輕にして受用し易きが爲に、滅亡の非運を免れし古智識の斷片なり。」とは、二千年の昔、但諺研究の率先者アリストテレス既に之をいへり。ツレンチはその俗諺論に於いて、「今日文明國の共有財産とも稱すべき諺は、各國民が祖先傳來の遺産にして、或は口々に語り継ぎ、或は前代の記者によりて後世に書き傳へられて、希臘拉典の古きより、中世の諺に至るまで、依然として今日に存し、諸國に行はる。されば、近き世に起りたる諺ならん、一般に信ぜらるゝものにして、その淵源の極めて悠久なるを發見する事少からず。」といへり。現今行はるゝ我が國の諺にも、其の發生時代の頗る遠きものあり。「痛む上に鹽塗る。」「重荷に小づけ。」の如きは、既に萬葉集に見え、「一升枅に二升は入らぬ。」といふは枕冊子に出て、「死ぬる子みめよし。」「飯粒で鯛釣る。」といふは、共に早く土佐日記に見えたり。此等が孰れも千年内

○なべて

○徴す

○淵源

○載籍

外の歴史を有するものならんとは、この諺を口にする人々の、なべて豫想せざる所なるべく、今日にては、既に之を徴すべきものなしと雖も、その淵源の遠き事、前數者に相譲らざるもの尙多かるべし。降りて鎌倉時代より室町時代に及べば、現代と同一なる諺の數、次第に多くなりゆくは、固よりいふ迄もなき事にて、この時代の載籍を通讀せし者の容易に認め得る所なり。祖先傳來のもの他に、外國より輸入せられたる諺あり。時としては、彼我相交換して、雙方同時に行はるゝより、孰れが借主にしして、孰れが貸主なるか、容易に判別し難きもの亦少からず。四面海を環らし、東海に屹峙せる我が國は、歐洲諸國の如く他國との交通自由ならず、人種言語の關係も亦彼の如くならざるより、他國と諺を貸借交換して、その本主の誰なるかを判ずるに苦しむが如き患少しと雖も、支那、朝鮮との交通夙に開け、儒佛の教

○内外典  
○外國將來  
合せもの  
○蓬必有衰、合會有別離。(涅槃經)  
○仰向きて  
惡人害賢者、猶如仰天而唾。(四十二章)  
蛙の面に  
蛙の水。(禪林句集)  
鹿の角を  
鹿角蜂。(禪林句集)  
渴すれども  
渴不飲盜泉之水、(文選)  
熱不息惡木之蔭。  
麒麟も  
麒麟之衰也、驚馬先  
之。(戰國策)  
麻につる、  
蓬生麻中、不扶而  
直。(荀子)  
井の中の  
井蛙不可語於  
海者、拘於虛也。  
情に及向ふ  
(莊子)  
○胎胎す  
仁者無敵。(孟子)

深く民俗に染みしより、内外典より來れる諺甚だ多く、一見して外國將來たるを認むべき者の他に、衣服外觀は純然たる國風ながら、尙その正體は儒佛にあらずやと疑はるゝもの往々これあり。殊に僧徒は布教の必要上、經文中の金言を俗譯して、眼に丁字なき善男善女を教化するより、その傳播極めて早く、廣く諺として世上に流布するに至る。「合せものは離れもの」「仰向きて唾はく」「蛙の面に水」「鹿の角を蜂が螫す」の如き、巧に日本化せられたり。「渴すれども盜泉の水は飲まず」「麒麟も老いては驚馬に劣る」の類は、何人も一見して國産に非ざるを知るべきも、「麻につるゝ蓬」「井の中の蛙」「情に刃向ふ刃なし」の如き、極めて通俗にして平易なるものが、佶偈なる儒教の語に胚胎せしものとは誰か思ふべき。「壁に耳」といふも古き諺なれど、既に詩經に「君子無易由言、耳屬于垣」の語あり。拉典にも同

一の諺ありて、それより汎く今日の歐洲諸國に分布せり。

維新後、西洋諸國との交通盛んにして、外國語を學ぶ者多きに隨ひ、外國の諺の輸入せられしものまたこれあり。「時は金」「習慣は第二の天性」「二兎を追ふ者は一兎をも獲ず」などの類即ち是なり。なほ又、人の社會に立つや、生活上絶えず新經驗に遭遇し、智識上に道德上に、新なる自家の確信を生ずるや、その經驗的所見を發表するに一種の文句を以てす。而して、その文句にして、幸に諺たり得べき資格を具備する時は、一般國民の贊同を博し、遂に諺として成立すべき權利を享有するに至る。

一國の俚諺は、生々蕃殖して窮期なきと共に、一方舊く行はれて、既に國民の記憶を去りたるものはた少からず。此の如く、舊を忘れ新を迎へて、俚諺は時代と共に増減變遷するものなり。

古來の典籍、殊にその通俗的なるものは、幾多の諺をその中に

○博す  
○享有す  
○生々蕃殖

○典籍

○截斷す

○辨知す

○相貌



山川の  
空也上人繪詞傳に出  
てゐる。

思ふこと

後水尾天皇の御製で  
あるといひ傳へてゐ  
る。

採録含蓄するのみならず、書中の佳句妙章は、往々世人に截斷割  
取せられて、恰も本來の諺なるかの如く使用せられ、時としては、  
漸次その語句を變更して、諺としての使用に便利ならしむる餘  
り、一見その出所を辨知し難きまで相貌を變ずるに至る事あり。  
和歌俳諧俗歌の類は、その形體短小にして、引用にも記憶にも便  
利なるを以て、諺の如く使用せらるゝもの多し。和歌より來れ  
るものは、例へば、

山川の末に流るゝ椽がらも

みすすててこそ浮む瀬もあれ

思ふこと一つ叶へば又二つ

三つ四ついつもむつかしの世や

の如き、俳諧の附句及び俳句、川柳より來れるものは、例へば、

草の名も所によりて變るなり

救濟

室町時代の人、連歌  
に巧みで二條良基の  
師である。

冠里

安藤對馬守信友の  
號、筑城國平の藩主、  
享保十七年(二五二)  
歿、年六十二。

千代

福田氏、加賀の人、  
安永四年(四三三)歿、  
年七十四。(一説に  
七十三)。

蓼太

大島氏、信濃の人、  
明和七年(三四〇)歿、  
年七十。

○人口に膾炙す

王彦章

梁の人、字は干名。  
歴山大王  
マケドニヤ王、フイ  
リップの子、西暦紀  
元前三三三年卒、年三十  
三。

浪花の蘆は伊勢の濱萩

救濟

物いへば脣寒し秋の風

芭蕉

雪の日やあれも人の子樽拾ひ

冠里

百なりや蓼一すぢの心より

千代

世の中は三日見ぬ間に櫻かな

蓼太

孝行をしたい時には親がなし

(川柳)

大男總身に智慧がまはりかね

(川柳)

の如きもの是なり。

其の他、偉人名士の語は直ちに當時の人口に膾炙し、永く後世  
に傳誦せられて、俗諺と伍を同じうするに至る。孔孟、釋迦など  
の金言の如きはいふも更なり、王彦章が「豹死留皮、人死留名」と  
といひ、歴山大王が、波斯の大軍來り襲はんとするを聞き、自若と  
して、「一屠兒、千羊を恐れず。」といひ、家康が五字七字の戒「う

○口頭を出づ

定家

藤原俊成の子、鎌倉初期の歌人、仁治二年(西暦一〇九〇)薨、年八十一、和歌に師なしの語は詠歌大概に出てる。

○揆一なり

○凡人庸流

○世故

○時俗を抜くこと一頭地

へをみな。みのほどをしれ。」の如き、一度此等偉人傑士の口頭を出づれば、忽ち千萬人の間に傳誦通用せられ、永く世の諺となりて滅びず。定家が「和歌に師匠なし。」と教へ、芭蕉が之に倣ひて、「俳諧に古人なし。」と唱へたるが如き、適用の範圍稍狭しと雖も、名人の一語、世上の諺となるに至つては、其の揆一のみ。諺は通俗を旨とすれども、必ずしも凡人庸流の口にのみ出づと斷ずべからず。寧ろ、世故に長け、機智に富み、才識時俗を抜くこと一頭地たる者にして、始めて痛切警拔なる人生の批評諷刺を擅にし得べきを記憶せざるべからず。「武士は食はねど高楊枝。」「花は櫻木、人は武士。」と高く標置し、「馬方、船頭、お乳の人。」「商人の空誓文。」と罵倒したるが如き、其の立言者の地位如何を察するに難からざるなり。

○緣由  
○一目瞭然

詩歌格言等より來れる諺は、その發生の緣由一目瞭然たれど

○車馬喧鬧

○愛願

○餓えず凍えず

も、斯の如きは、無數の俚諺中極めて小部分にして、その大多數は、何時如何にして生ぜしか、生誕の時日も出自の父母も漠として知るべからざること、恰も車馬喧鬧の十字街頭に置去りにせられたる棄兒の如し。幸にしてこの兒愛敬ありて人なつこく、機轉利きたるより衆人の愛願を得、餓えず凍えず、無事に成長して世間に重寶がらるれども、人も我もその來歴如何を知る能はざるは、依然として少しもありし昔に異ならざるなり。されば、諺の起源として世に傳へらるゝ話柄は、信據すべきもの極めて少く、諺の起源といはんよりは、寧ろ諺の爲に後日想像附會せしにあらざやと疑はるゝもの十の七八なり。さるを強ひて、之が起源を求めんとするは、猶棄子の系圖を作るが如く、所謂「骨折損の草臥儲」たる事多かるべし。

一八天 明 調

炭 太祇  
江戸の俳人、明和八年(四三)歿、年六十三。

與謝蕪村  
俳人、畫家、名は實、天明二年(四三)歿、年六十八。

〇蕭條

久村曉臺  
名古屋の俳人、寛政四年(四三)歿、年六十一。  
加舎白雄  
信濃の俳人、寛政三年(四二)歿、年五十三。

山路來て向かふ城下や凧の數  
炭 太祇

塵塚に朝顔咲きぬ秋の暮  
同

春の海ひねもすのたりくかな  
與謝蕪村

金屏の赫奕として牡丹かな  
同

鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分哉  
同

蕭條として石に日の入る枯野かな  
同

あかつきや鯨のほゆる霜の海  
久村曉臺

蠅一つわれをめぐるや冬籠り  
同

いちはやく燃えてかひなし櫓の蔦  
加舎白雄

高桑園更  
金澤の俳人、寛政十年(四五)歿、年七十三。

大島蓼太  
信濃の俳人、明和七年(四〇)歿、年五十三。

三浦樗良  
伊勢の俳人、安永元年(四三)歿、年五十二。

黒柳召波  
京都の俳人、明和八年(四二)歿。

高井几童  
京都の俳人、寛政元年(四四)歿、年四十九。

美しや春は白魚かひわり菜  
同

枯れくし野中に松の嵐かな  
高桑園更

枯蘆の日にく折れて流れけり  
同

五月雨やある夜ひそかに松の月  
大島蓼太

わが影の壁にしむ夜やきりぎりす  
同

山寺や誰もまるらぬ涅槃像  
三浦良樗

我が庵は榎ばかりの落葉かな  
同

何を釣る沖の小舟ぞ笠の雪  
黒柳召波

憂きことを海月にかたる海鼠哉  
同

欠して月ほめてゐる隣かな  
高井几童

大佛を見かけて遠き冬野哉  
同



○浄土を願ふ

○上人  
○さよめく

○請す

一九 おらが春

小林 一茶

一 おらが春

昔丹後の國普甲寺といふところに深く浄土を願ふ上人あり  
 けり。年の始は世間は祝をしてさよめければわれもせんとて大  
 晦日の夜ひとり使へる小法師に手紙したゝめ渡してあすの曉  
 にしかくせよときと言ひをしへて本堂に泊りにやりぬ。  
 小法師は元日の旦いまだ隅々は小暗きに初雞の聲と同じく  
 がばと起きて教のごとく表門を丁々と敲けば内より「何處よ  
 り」と問ふ時、「西方彌陀佛より年始の使僧に候。」と答ふるよ  
 り、とく上人はだしにて踊り出で門の扉を左右へさつと開きて  
 小法師を上座に請じてきのふみづから認めし、かの手紙をとり  
 て、恭しく押戴きて讀みて曰く、

○聖衆

○淨衣

ひいき目に見てさへ  
 寒いそぶりかな  
 おのが姿にいふ人  
 も一茶

○無常

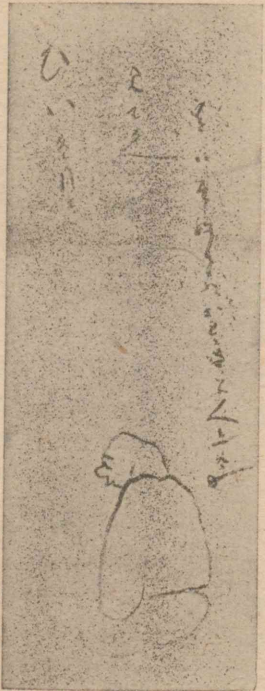
○骨頂

○俗塵

○空々し

それ世界は衆苦充滿に候間、とくわが國に来るべし。聖衆出  
 迎へて待入り候。

と讀みをはりて、おうくくと泣かれけるとかや。



一茶自畫自讃

つゝ、初春の淨衣  
 をしほりて、滴る  
 涙を見て祝ふと  
 は、ものに狂へる  
 様ながら、俗人に

對して無常をのぶるを禮とすると聞くからに、佛門に於いては  
 祝の骨頂なるべし。

それとは些か變りて、おのれらは俗塵に埋れて世渡る境涯な  
 がら、鶴龜にたぐへての祝ひづくしも、厄拂の口上めきて空々し

○おもほゆ

○あなた任せ  
なん……ける。

くおもほゆれば、から風の吹けば飛ぶ層家は、層家のあるべきやうに門松立てず、煤掃かず、雪の山路の曲りなりに、今年の春もあなた任せになん迎へける。

めでたさも中位なりおらが春

こぞのさつきに生まれたるわが娘に、一人前の雑煮の膳を据ゑて、

這へ笑へ二つになるぞ今朝からは

二 乞食袋

○殊勝

○卯の花月

今年みちのくの方修行せんと乞食袋首にかけて、小風呂敷せなかに負ひたれば、影法師はさながら西行らしく見えて殊勝なるに、心は雪と墨染の袖と思へば、入梅晴れのそらはづかしきに、今更すがた替へるもむつかしく、卯の花月十六日といふ日、久しく寝馴れたる庵をうしろになして、二三里も歩みしころ、細

○一期の月も西山に  
かたぶく命

杖をつくく、思ふに、おのれすでに六十の坂登りつめたれば、一期の月も西山にかたぶく命又ながらへて歸らんことも、白川の關をはるく、越ゆる身なれば、十府の菅菰の十に一つもおぼつかなしと案じつゝくる程に、ほとんど心細くて、家々の雞の時を告ぐる聲もとつてかへせとよぶやうに聞え、畠々の麥に風のそよ吹くも誰ぞまねくごとく覺えて、行く道もしきりにすゝまざれば、とある木蔭に休らひて、瘦脛さすりつゝ、詠めるに、柏原はあの山の外、雲のかゝれる下あたりなどおしはかられて、何となく名残をしさに、

思ふまじ見まじとすれど我が家かな

三 露の世ながら

楽しみ極りて愁ひ起るは浮世の習なれど、いまだ楽しみ半ばならざる千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛なるみどり子を、寝

○さなか

耳に水のおし來る如き、あらくしき痘おぼろの神に見込まれつゝ、いま水膿のさなかなれば、やをら咲ける初花の、泥雨にしをれたるに等しく、側に見る目さへ苦しげにぞありける。これも二三日経たれば、痘はかせぐちにて、雪解の峽土のほろく落つるやうに瘡蓋かさといふもの取るれば、祝ひ囃して、さんたら法師といふを作りて、笹湯浴びせる眞似かたして、神は送り出したれど、ますます弱りて、昨日より今日は頼み少く、終に六月二十一日の朝顔の花と共に、この世をしぼみぬ。母は死顔にすがりて、よゝと泣くもむべなるかな。この期に及んでは、行く水の再び歸らず、散る花の梢に戻らぬ悔いごとなどと、あきらめ顔しても、思ひきりたきは恩愛のきつななりけり。

○露の世  
○さりながら  
○あらが春  
一茶の俳文集。

露の世は露の世ながらさりながら

(あらが春)

○笹湯

泉 道雄

教育家、宗教家、千代田女子専門學校長、山口縣の人、明治十一年生。

○性急化

○營々

## 二〇 家庭の平和

泉 道 雄

社會を活動の舞臺とすれば、家庭は平和の樂園であります。時代の進運は社會を次第に複雑化し、人心を益、性急化する傾向がありますから、終日營々として活動を續けてゐる人々にとつては、家庭は唯一の慰安處であり、活動の源泉地であります。

世の中には、家庭と社會とは何の關係もないものやうに考へる人もありますが、それは大きな誤解で、家庭は小さな一つの社會であります。この小さな社會が集つて、大きな社會も國家も出來たのであります。それ故、私共が家庭の平和を計つて善良な家庭を作れば、やがてそれは善良な社會、國家を作ることになるのであります。

家庭は親子、夫婦、兄弟、姉妹等の近親者が集つて共同生活を營

○連帶責任

○就中

負は。

○悅樂

む處であります。そのためには家族が皆連帶責任を持つべきものであります。就中家長夫婦はその中心となつて、重要な責任を負はなければなりません。それ故、夫婦は互に相理解し相敬愛して、兩親舅姑に仕へ、弟妹子女をいたはつて、家庭を悅樂慰安の場處としなければなりません。

○顧慮する

倉廩實ちて云々  
「管子」にある句。

○無視する

○順應する

家庭の平和を計るには、物質的方面と精神的方面とを顧慮しなければなりません。「倉廩實ちて禮節を知る。」といふ語がありますが、家庭の平和も或程度までは經濟的の要求を無視してはなりません。現代社會の文化は著しい進歩發展を遂げて居ります。この現代に生活して行くには、衣食住何れも時代に順應して行く必要があります。随つて、家屋の構造にしても、採光通風換氣保温裝飾等を考慮し、家の内部を明るくして、物質的にも感じの好いやうにしなければなりません。又衣服食物の如

○斟酌する

○素因

○分相應

○一家團樂  
○資する

○懸意

○四方山の話

○助長する

きも衛生と經濟とを斟酌して改善を計らなければなりません。此等のことは皆家庭生活を和樂にする素因であります。

家庭和樂の一助として、分相應の設備を整へたり、會合を催したりすることも必要であります。例へばラヂオや、蓄音機樂器その他ピンポン、碁盤等、適宜の設備を整へて、一家團樂に資するのことも好ましいこととあります。又此等の設備がなくとも、時々、親戚や懸意な間柄のものが集つて、子供會や家族會等を催し、四方山の話や、童謡、童話、謠曲、仕舞などをして、一夕を樂しむのも、今後の家庭には望ましいこととあります。

今日世間一般には、芝居活動寫真などの外部にある娛樂場に出かけて、家族の和樂を求めようとする風習がありますが、なるべく家庭内に於いて互に相樂しむ氣風を助長したいものであります。

○資財

しかし、物質的方面の充實のみでは、決して家庭の平和を期待することは出来ませぬ。否、世には資財の豊富なために、却つて家庭の平和を破壊してゐるものも澤山にあります。物質的方面は家庭の平和のためには、あまり重要な條件ではありません。要は精神的方面にあります。

○要は

聖徳太子は十七條憲法の第一章に「和を以て貴しとなす。忤ふことなきを宗となす。」と掲げて居られます。これは社會國家を治める上に就いて仰せられたのでありますが、家庭の平和を保つ上に於いても大切な箴言であります。和するといふことは、常に愉快な氣持を以て



聖徳太子像

○箴言

人に接し、他人に不快な感情を起させないやうに努めることとてあります。

○些細

家庭は最も親しい間柄の人々の集團でありますから、とかく親しさの餘りに無遠慮に流れて、些細なことに怒つたり腹立つたりするやうな場合が多いのであります。又互の意志や感情を十分に顧慮しないで、わがまゝを通さうとする傾向が強いのであります。これがために、とかく誤解や争論が起り易く、遂には家庭の波瀾を惹起するやうなことになるのでありますから、各自が能く注意し反省しなければなりません。殊に主婦は家庭の中心でありますから、常に愉快な顔色と温かい言葉とを以て、家庭の調和者とならなければなりません。

○波瀾  
○惹起する

經に「和顔愛語」といふ語がありますが、私どもは不斷にこの語に含まれてゐる態度を以て人に接するやうにしたいもので

經  
「經大無量壽經」を指す。

味はふ

○靈化する

○逆境

○確乎とした信念

○有終の美

あります。

むつとして歸れば門の柳かな

といふ古人の句も、大いに味はふべきであります。

なほ家庭に必要なものは宗教であります。宗教の信念は家庭を美化し淨化し靈化するものであります。長い間の家庭生活には、人生の無常や逆境に遭遇することもありますが、ちてあります。その場合に、確乎とした信念を抱いて難局を切開くだけの用意がなくてはなりません。

この用意があつて、始めて家庭の平和に有終の美を添へることが出来るのであります。

(新女子國文)

阿部次郎

哲學者、東北帝國大學教授、山形縣の人、明治十六年生。

○陳腐

○利弊

○讀書慾

○體驗  
○思索

二 讀書の意義

阿部次郎

世の中には、極めて平凡で陳腐な問題で、しかも時々振返つて之を考へ直して置かないと、吾々の生活の歩みが空になる様な性質のものがある。讀書の意義といふ様な事も、世人の多數にとつては、恐らくこの類の問題の一つである。讀書は誰でもする事であるが、大多數の人はその意義と利弊とを考へてゐない。併し、文化の進歩に伴つて、讀書慾が急速に増加するにつれ、又、讀書の態度が眞劍の度を加へるにつれて、この問題をはつきり考へて置く必要は益、加つて来る。

讀書は體驗を豫想する。自ら眞劍に生活し、眞劍に思索してゐる人にとつてのみ、讀書は効果がある。讀書は吾々の思索と體驗とを補ふことは出来るが、之に代ることは出来ない。讀書

の意義を考へる時、吾々は第一にこの事を記憶して置かなければならない。

従つて、若し人が一冊の書でも、之を本當に理解しようと思ふならば、唯之に嚙り附いたり、之と睨めつくらしたりしてゐるべきではない。假令、その人が之を読みかへし、又読みかへして、一生その書を手から離さないにしても、若し、その書の根本問題を自己の問題とする事を知らず、その書の背景になつてゐる人生の體驗を自ら體驗する事を知らず、又、著者の思索の努力を自己の中に繰返す事を知らないならば、たゞ小僧がお經を誦む時のやうに、その書を暗誦するのみで、その人の生活はこれによつて、豊富にも、力強くも、高くもならないであらう。寧ろ無用の記憶は、彼の頭腦を硬くして、讀書は平生の馬鹿を一層馬鹿にするに過ぎないであらう。讀書の意義を考へるものは、先づその價

○轉倒する

○適用

○念頭に置く

○運用する

値の限界を考へなければならぬ。吾々にとつて最上の意義を持つてゐるのは生活であつて、決して讀書ではない。此の間の關係を轉倒して、讀書に無條件の價值を置くのは、寧ろ讀書からその正當な價值を奪ふ所以に過ぎないのである。この事は、理化の書にも、家政の書にも、料理の書にも、齊しく適用される。自然現象に對する觀察と實驗、家庭の實際、生活に於ける苦心と活用、臺所に於ける調理と食卓に於ける玩味、かういふ様な事を始終念頭に置き乍ら、書物に書いてある事を確めたり、批評したり、訂正したり、運用したりしないならば、讀書は唯暇潰しの道樂になつて了つて、その知識はいつまでも本當に自分のものとなる事がないであらう。

併し、就中、自分の生活と體驗とに照らして、根柢から之を吟味する心掛の特に必要なのは、哲學や文藝に關する書である。か

○無形の眞理

○人心の機微

ういふ種類の文獻の中に取扱はれてゐるのは、無形の眞理か、人心の機微かである。この場合には、吾々は理化や料理の書の場合の様に、之を實際に徴すべき有形な物を持つてゐない。時代の推移や人間の心理は、社會現象の考察や他人の喜怒哀樂の表情の觀察に徴して、書物に書いてある事の眞偽を判斷する事が出来るのは勿論であるが、この場合、その根據になつてゐる社會現象の意味、他人の表情の意味は、結局自分自身の内面的體驗を基礎としなければ、解釋の出来ない筈のものである。随つて、吾々は最後の根柢に於いては、唯深く自分の内面を省みる事によつて、書かれてある事の眞偽を判定するより外はないのである。平生自ら體驗を深める努力もせず、自ら思索し、自ら内省する習慣をも作つて置かない者は、書を讀んでも本當の意味を理解する事が出来ず、唯徒に之を記憶するか、若しくは、盲目的に之を信

○内面的體驗

○内省する

○生の流動

○壅塞

仰するかに過ぎないであらう。併し、十分に理解されぬ記憶の集積と、腹の底から得心の行かぬ盲目的な信仰とは、吾々の生の流動を妨げる石塊のやうなものである。之を持つことが多ければ多い程、吾々の生活は却つて之がために壅塞されるのである。こゝに哲學や文藝の方面に於いて、讀書を第一と考へることの特別な危険がある。

吾々の生活の發展の最初の地盤となり、吾々の思索の第一の出発點となるものは何であるか。それは吾々自身の體驗である。吾々自身の體驗の外には何もものもある事を得ない。吾々の最初の體驗はもとより完全なものではないが、その中に隠れてゐるものを明るみにひき出し、その中に潜んでゐる矛盾と戦を重ね、その中に具つてゐる内面的傾向を次第に推し進める事によつて、吾々の生活は始めて發展し、吾々の思索は始めて眞理

○内面的傾向



○盲信する

○懷疑の淵に沈む

○輕信

に接近する。若し吾々が吾々の生活に關する眞理の標準を例へば物理学に於けるが如く、自己以外に固定した尺度に求めるならば、吾々はいつまでたつてもそんなものを發見する事が出來ないであらう。吾々は永遠にたゞ與へられたものを盲信するか、若しくは永遠に懷疑の淵に沈んでゐなければならぬであらう。輕信と懷疑とは雙生兒である。無きものを有ると考へるのは輕信である。眞理を求めるのに最初からそれが無いときまつてゐる方面を捜し廻つて、永久に無いといつて騒ぎ立てるのは懷疑である。幻の上にその思想の根柢を築かうとしてゐる點に於いては、兩者共に同様である。生活に於いても、思索に於いても、假初にも堅實な歩みを始めようとするならば、吾々は自分の體驗を信じて之を尊重する事を學び知らなければならぬ。讀書の價値も亦この信念の上に立つて、始めて

發揮されるのである。

この信念を基礎としない時、讀書は吾々にどのやうな弊害を與へるであらうか。第一に、それは善惡美醜正邪に對する純朴な本能を紊して、之を混亂させ、之を麻痺させる。全然文字を知らぬ田夫野人が、半可通の讀書子よりも人情の美醜を解し、善惡正邪に對して彼等一流の判斷を持つてゐるのは、彼等が兎に角讀書によつて迷はされない本能を持ち續けてゐるからである。第二に、體驗の根柢を缺いてゐる讀書は、吾々の思考力を薄弱にする。吾々は雑多な意見を聞きかじる事によつて、自分自身の判斷が無い人間にされてしまふ。さうして第三に、吾々は前にいつたやうな種々の理由によつて、結局吾々の生活そのものの統一を奪はれ、生活そのものの力を失ふ様な恐しい破目に陥る。吾々の生活には踏みしめるべき大地もなく、歩み出すべき出發

○田夫・野人  
○半可通  
○讀書子

○他人事

點もないものとなつてしまふ。この點に於いて、誤れる讀書によつて、今日の生活が如何に損はれてゐるか、他人事ならぬ吾々自身の問題として、吾々は深く省みる所がなければならぬ。吾々は無學な人を嘲る前に、先づ多少の學問によつて、却つて自分自身が馬鹿になつてゐる様な事がないかと言ふ事を考へて見る必要がある。生活の狭い事は決して喜ぶべき事ではないが、狭くても自分の生活を持つてゐる者は、凡そ自分の生活を持つてゐない者よりも遙かに優つてゐる。

昔ゲエテがゴシック藝術について云つた言葉は單に藝術のみではなくて生活そのものにも亦あてはまるであらう。——若しそれが一切の外物を顧慮せず、或はそれを知らずに自分の内面的な獨自な感じから出發してゐるならば、それが荒々しい粗野から産まれてゐるにもせよ、又、教養ある敏感から生まれてゐるにもせよ、兎に角、それは完きもの、生きたものである。『併し、荒

ゲエテ  
ドイツの大詩人。(西  
曆一七九七—一八三三)  
ゴシック藝術  
西洋建築の一形式、  
十三世紀の中頃起  
る、建築を形成する  
線が垂直で奇巧の趣  
がある。  
引用文は共にゲエテ  
の「獨逸建築につい  
て」によつてゐる。  
○教養ある敏感

○最高の度  
○局限

るにもせよ、兎に角、それは完きもの、生きたものである。『併し、荒  
ましい粗野から産まれたもの』よりも、『教養ある敏感から生  
まれたもの』の方がよい事は言ふまでもない。無知は吾々の  
生活を狭くし、吾々の思想を偏らしめ、吾々と他人との交通を困  
難なものにする。吾々が、最高の度まで、吾々の中に潜んでゐる  
力を發揮しようとするならば、他人の體驗を通して、自分の局限  
された一生の中に觸れ得ないやうな體驗をも味はひ、他人の思  
索によつて自分の思想を豊富にし、かくて一人の生涯の中に、千  
萬人の生涯を攝取する事を心掛けなければならぬ。特に社  
會生活の内面的結合は他人の心を理解する事によつてのみ可  
能である。事を思へば、吾々は他人の體驗に参加する事を怠つて、  
自分自身の中にのみ閉ぢ籠るべきではない。茲に於いて、讀書  
の意義は甚だ重大さを加へる。書を讀むと讀まぬとは、第一義

の意味に於いて人間の價値を左右するものではないが、それは深く人間の價値と關係して、頗るその向上を助ける。正しい道さへ踏み外さないならば、書物を讀めば讀むほどよいものである。さうして、讀まなければ讀まないほど悪いものである。

たゞ、讀書の意義は、吾々の體驗を基礎としてのみ成り立つものであるとすれば、どんな良書も、此方の體驗が足りないかぎり、十分に理解する事が出來ないのは止むを得ない。特に偉人がその一生の體驗と思索とを籠めたやうな大作になると、それは吾々の體驗と思索とが、大きくなればなるほど、何處までもますます大きく見えるであらう。幾度讀み返しても常に新しい味はひを吾々に味ははせるであらう。この意味に於いて、吾々が本當に良書を理解しようと思ふならば、吾々は先づ自分自身の生活を大きくしなければならぬ。吾々が全力を盡くして考

○遭逢する

へたり、味はつたりしても、とても理解し得ないやうな書に遭逢したならば、吾々は暫くその書を離れて、直接の人生に歸つて行くがよい。さうして、其處で得たものを携へて、適當の時期を見計らつて再び書物に歸るがよい。その時吾々が直接の人生から携へて來たものは、その書物を理解する爲に、大いに裨益する事があるであらう。自己の成熟を待たずに、無暗に之にかじり付くのは極めて愚策である。自然科学の知識の根原が自然にあるやうに、人間智の根原は凡べて直接の人生にある事を忘れてはならない。

○裨益する

○愚策

書を読むとは心を読むのである。自己の心を読む事を知らぬものが、どうして他の心を読む事が出來よう。

(人格主義)

五十嵐力  
國文學者、文學博士、  
早稻田大學教授、山  
形縣の人、明治七年  
生。

二二 國語の愛護

五十嵐 力

○執筆する

○衆美

○目安

私は國語を豊かにまた統一あるものにしたと思ひます。今後の國語、國文は、大體において、現代の口語を本位とすることになりませう。これは當然のこと、またそれで結構なことでありますが、たゞ口語の一方に執著して、他の要素を一切排斥するといふことでは、將來の國語を貧弱にし、狹小にする憂があらますので、私は是非、「現代の口語を本位とし、基調として、廣く衆美を總攝する。」といふことを、目安の心得にしたいと思ひます。本來我々の思想は、その生まれた國、生まれた時代の言葉で現さるべきものであります。支那人の思想は支那語で現され、英國人の思想は英語で現されるのが自然であると、同じやうに、また平安朝人の思想が王朝言葉で現され、鎌倉時代人の思想が鎌

○魁

倉言葉で現されるのが自然であると同じやうに、明治、大正、昭和時代の日本に生まれた我々の思想が、明治、大正、昭和時代の日本語で現されるのは、當然のことでありませう。本居宣長が、「古事記傳」に、心持と事柄と言葉との三つが調和してたすけあはねば、立派な活きた文章は出来ぬと説いたのは、そのためであります。

また、言語文章の推移變遷は、話し言葉が魁をなして、書く方の文章がその後を追ふのが普通であり、書く文章の中では、散文が魁をなして、詩歌がその後を追ふのが普通であります。そして散文の中では、文學的文章が魁をなして、普通の文章がその後に續くのが普通であります。明治の口語文は、最初に小説に現れましたが、だん／＼普通文に現れるやうになり、つゞいて韻文、詩歌に現れるやうになりました。この大勢から見れば、昭和今後

○歸一する

の標準文章が口語式に歸一すべきことは、疑のないことといつて差支ありません。

さて、その口語文のいかなるものなるべきかに就いては、いろいろの説があつて、多數の意見が必ずしも一致しないやうに思はれます。その中で最も多いのは、口語文は今の人のしやべる通りに書くべきもの、文字通りに口語そのまゝか、或は口語に少し磨きをかけた程度に書くべきもので、古語や外國語を取入れるべきものではないといふ考で、この考をもつてゐる人は、普通民衆のみならず、立派な知識階級の人の中にも澤山あるやうに思はれます。かういふ人たちは、古語を取入れ、或は漢語などを取入れると、いかにも取るべからざる餘所物を取つたかのやうに思ひます。しかし、口語文の意義本質理想を、しやべるがまゝの純口語乃至準口語に限るのは、みづから低くし、狭くし、貧しく

○窒息する

○基調

○攝取する

し、卑しとする所以であつて、口語文の前途を塞ぎ、口語文を窒息させるものであると私は考へます。私は口語文といふものは、その理想的本質からいふと、たゞ口語を本位とし、口語に基調を置くといふだけで、その本位を冒さず、基調に合し得る限りは、古今東西のあらゆる言葉文體を攝取して、みづからを肥し、ゆたかにすべきものであると考へます。我々が父祖の遺産を繼承する場合の事情が、ちやうどこれと同じではありませんか。我々は親の財産を承継いて、自分の理想を實現するために、それを活用し、利用すべきでせう。なほその上に、他からいろいろの要素を取入れて、大きくして子に傳へ、子は同様の方法によりさらに大きくして孫に傳へ、孫は更に／＼大きくして曾孫に傳へるべきでせう。新しい國語、國文樹立の消息も同じこととて、たゞその基調を外すか外さないかが問題であります。いかにしてそ

の基調を外さずして、多くの他の要素を攝取し得るかが問題であると思ひます。

基調は何物にもありませんが、假に音曲發聲の方面に就いて見ると、謠曲・淨瑠璃・琵琶歌等、皆その音の高低なり音色なりに、一種の基本となるべき調子があつて、その中に攝取される前代及び同時代の他の音曲は、皆その基本調子に化せられるために、いひかへれば、他の音曲を從屬せしめるために、その音曲が獨立した高い價值をもつことになるのでせう。そして他の要素を我が基本調子に化する呼吸は、向ふの特色を取りながら、その角を倒して我に反を合はさしめるにあると思ひます。「平家」が謠曲に取入れられる時には、「平家」の特色をば見せながら、謠曲になじむやうにその角を倒されました。謠曲が淨瑠璃に取入れられる時には、同じ謠曲の特別味を見せながら、淨瑠璃の基調に

○角を倒して反を合はす

○なじむ

なじむやうにその角を倒されました。いはば、本曲の主位を立てて、穩かに從位につくといふ呼吸で、例へば、日本文に英語を挿む時の読みぶり、英文に日本語を挿む時の読み方の呼吸などが、ちやうどそれだと思ひます。日本文の間に挿入する英語を、英語そのままの發音やアクセントで讀んだら、變なものでせうが、英語は英語ながら、日本風の發音アクセントにしてしまふから、即ち我が主位を立て、英語を臣僕扱ひして、我に對して從屬的態度を取らせるから、それで立派な本文として讀まれ、また日本語だけよりは、むしろ變化に富んだ、趣味の豊富な日本文として賞されることになるのであらうと思ひます。

要するに、外國語でも、これを日本文の中に挿入する時には、その主位を奪ひ角を倒して、日本文になじませればよいので、同じ道理で、古語を現代の口語文の中に加へる時にも、その主位を奪

○臣僕扱ひ

ひ角を倒して、口語の基調になじませればよいわけであらうと思ひます。そして、それがむしろ現代口語文の大を成し、變化を添へ、趣味を豊かにする所以であらうと思ひます。またこれが實際各時代の我が文學の常にやつて來たことでありました。例へば、「平家物語」の一節、清盛の淨海が熱病に罹り、大苦しみをして死ぬるところの光景を描いた一節に、

「もしや助かると、板に水を置きて臥しまろび給へども、助かる心地もし給はず。同じき四日の日、悶絶<sup>もんぜつ</sup>躰<sup>たゝ</sup>地<sup>ぢ</sup>して、終にあつち死<sup>に</sup>ぞし給ひける。」

とありますが、この中には、少くとも質<sup>たち</sup>の違つた三種の言葉が混つてゐます。一つは「臥しまろび給へども」「し給ひける」といふ調子の王朝詞、一つは「悶絶躰地」といふ漢語、そしてもう一つは「あつち死」といふ當時の俗語であります。王朝語の方は説

四日  
治承五年(一一八四)二月。

悶  
え。

明するまでもありませんが、「悶絶躰地」は、悶え／＼息が絶え入り絶え入りしては、ちだんだん踏んで苦しんだといふことで、むづかしい漢語、そして「あつち死」は「あつち、ち、ち、／＼、と叫びながら死んだ。」といふ事で、俗語も俗語、大俗語であります。「平家物語」には、かやうに質の違つた三種の言葉が、各、それ／＼の特色を見せながら、少しも喧嘩せず、仲よく並んで、一つの調和した空氣を成り立たしてゐるではありませんか。これは王朝語を主位に立てて、他の二つが反を合はせた結果でありませうが、かういふ調子でゆけば、現代口語文の中に古語を入れようとも、外國語を入れようとも、また方言を入れようとも、少しも差支ないことと私は思ひます。

(國語の愛護)

二 隅 田 川

ワキ詞「これは武藏國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ、人を渡さばやと存じ候。又此の在所にさる仔細あつて、大念佛を申す事の候ふ間、僧俗を嫌はず、人數を集め候。其の由皆々心得候へ。」

男次第「末も東の旅衣、末も東の旅衣、日も遙々の心かな。詞「かやうに候ふものは都のものにて候。我東に知る人の候ふ程に、彼のを尋ねて、只今罷り下り候。道行「雲霞あと遠山に越えなして、あと遠山に越えなして、いく關々の道すがら、國々過ぎて行く程に、こゝぞ名に負ふ隅田川、渡に早く著きにけり。詞「急ぎ候程に、是れは早や隅田川の渡にて候。又あれを見れば、舟が出て候。急ぎ乗らばやと存じ候。いかに船頭殿、舟に乗らうずるにて候。」

シテ 梅若丸の母  
ワキ 渡守  
子方 梅若丸の幽霊  
ツレ 旅人  
處 武藏  
季 三月  
僧 俗

〇名に負ふ

〇なか／＼の事

〇さん候

人の親の  
人の親の心は闇にあ  
らねども子を思ふ道  
に惑ひぬるかな。  
聞くや如何に  
(後撰集)

眞葛が原  
京都市東山區圓山公  
園の南のあたり。  
〇人 商人

〇千里を行くも親心

ワキ詞「なか／＼の事。めされ候へ。先づ先づ御出で候ふあとの、けしからず物騒に候ふは何事にて候ふぞ。男「さん候。都より女物狂の下り候ふが、是非もなう面白う狂ひ候ふを見候ふよ。ワキ「さやうに候はば暫く舟を留めて、彼の物狂を待たうずるにて候。」

シテサシ「實にや、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の道行き人に言づつて、行方を何と尋ぬらん。聞くや如何に、うはの空なる風だにも、地「松に音する習あり。シテ「眞葛が原の露の世に、地「身を恨みてや明け暮れん。シテ「是れは都北白川に年經て住める女なるが、思はざる外に一入子を、人商人に誘はれて、行方を聞けば、逢坂の關の東の國遠き東とかやに下りぬと、聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり思ひ子の跡を尋ねて迷ふなり。地「千里を行くも親心、子を忘れぬと



四鳥の別

桓山之鳥、生三四子、  
焉、羽翼既成將分、  
于四海、其母悲鳴而  
送之。(孔子家語)

〇お事

隅田川  
十神丸事件  
 是れは武藏の國隅田川の渡守  
 みては舟の舟とまきいんと渡  
 さまやと海に舟とまきいんと渡  
 さる子細ありて大念佛とす事  
 つの同僧侶と嫌ひす人教と事あ  
 りその由皆を心得し

東の旅衣より東の旅衣  
 日も遠の心は山にわうあ  
 者の都の去きてわれ東にお  
 る人の心程よかの者と尋ねて只  
 今、罷りたりし、雲霞、あは遠  
 び、知えり、あは遠、あは遠、あ  
 して、げ、開、の、途、す、び、開、を、過、ま

聞くものをもとよりも契假  
なる一つ世の契假なる一つ  
世の、其の内をだに添ひもせ  
て、此處や彼處に親と子の四  
鳥の別これなれや。尋ぬる  
心の果やらん、武藏の國と下  
總の中にある隅田川にも著  
きにけり。隅田川にも著き  
にけり。シテ「なう、我をも  
舟に乗せて給はり候へ。ワキ詞  
「お事は何處より何方へ下  
る人ぞ。シテ」是れは都より人  
を尋ねて下るものにて候。

〇うたてやな

日も暮れぬ  
渡守、船にのれ日も  
くれぬといふに云々  
(伊勢物語)

名にし負はば  
伊勢物語の歌。

都鳥



ワキ「都の人といひ、狂人といひ、面白う狂うて見せ候へ。狂はず  
ば、此の舟には乗せまじいぞとよ。シテ」うたてやな。隅田川の渡  
守ならば、日も暮れぬ、舟に乗れとこそ承るべけれ。かたの如く  
も都の者を舟に乗るなと承るは、隅田川の渡守ともおぼえぬ事  
なのたまひそよ。ワキ詞「實に、都の人とて、名にし負ひたる優  
しさよ。シテ」なう、其の詞はこなたも耳に留るものを。かの業平  
も此の渡にて、名にし負はばいざ言とはん都鳥、我が思ふ人はあ  
りやなしやと。なう、舟人あれに白き鳥の見えたるは、都にては  
見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ふぞ。ワキ「あれこそ沖の  
鷗候ふよ。シテ」うたてやな、浦にては千鳥ともいへ、鷗ともいへ、な  
ど此の隅田川にて白き鳥をば都鳥とは答へ給はぬ。ワキ「實に實  
に、誤り申したり。名所には住めども、心なくて都鳥とは答へ申  
さで、シテ」沖の鷗と夕波の、ワキ「昔にかへる業平も、シテ」ありやな

うたて

舟ぎほふ

ふなぎほふ堀江の川  
のみなぎはに來るつ  
つ鳴くは都鳥かも  
(萬葉集)

舟こぞりて

舟こぞりて並きにけ  
り。(伊勢物語)

こそ…ね

構へて

しやと言とひしも、ワキ「都の人を思ひ妻、シテ」わらはも東に思ひ子の、行方を問ふは同じ心の、ワキ「妻をしのび、シテ」子を尋ぬるも、ワキ「思は同じ、地」我も又いざ言とはん都鳥、いざ言とはん都鳥、我が思ひ子は東路に、ありやなしやと問へども、答へぬは、うたて都鳥、鄙の鳥とやいひてまし。實にや、舟ぎほふ堀江の川のみなぎはに、來あつゝ、鳴くは都鳥。それは難波江、これは又隅田川の東まで、思へば限りなく遠くも來ぬるものかな。さりとはは渡守、舟こぞりて狭くとも乗せさせ給へ。渡守、さりとは乗せてたび候へ。ワキ「かゝるやさしき狂女こそ候はね。急いで船にのり候へ。此の渡は大事の渡にて候。構へて靜かに召され候へ。男詞」なうあの向ふの柳の下に、人の多く集りて候ふは、何事にて候ふぞ。ワキ詞「さん候、あれは大念佛にて候。それにつきて哀なる物語の候。此の舟の向ふへ著き候はん程に、語つて聞

○違例す

○なんぼう

○路次

○前世の事

○末期

○かどはす

○足手影

かせ申さうずるにて候。さても去年三月十五日、而も今日に相當つて候。人商人の都より年の程十二三許りなる幼きものを買取つて奥へ下り候ふが、此の幼きもの、未だ習はぬ旅の疲にや、以ての外に違例し、今は一足もひかれずとて、此の川岸にひれ伏し候ふを、なんぼう世には情なきものの候ふぞ、此の幼きものをば其の儘路次に捨てて、商人は奥へ下つて候。さる間、此の邊の人々、此の幼きものの姿を見候ふに、由ありげに見え候ふ程に、さまざまに、いたはりて候へども、前世の事にてもや候ひけん、ただ弱りに弱り、既に末期と見えし時、お事は何處、如何なる人ぞと、父の名字をも、國をも尋ねて候へば、我は都北白川に、吉田の何某と申しし人の唯一人の子にて候ふが、父には後れ、母ばかりに添ひ參らせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうになり行き候。都の人の足手影も懐かしう候へば、此の道の邊につき籠めて、し

○逆縁

るしに柳を植ゑて賜はれと、おとなしやかに申し、念佛四五遍唱へ、遂にこと終つて候。なんぼう、あはれなる物語にて候ふぞ。見申せば、船中にも少々都の人もござありげに候。逆縁ながら念佛を御申し候ひて御弔ひ候へ。よしなき長物語に舟が著いて候。とくく、御上り候へ。男詞「如何さま、今日は此處に逗留仕り候ひて、逆縁ながら、念佛を申さうずるにて候。ワキ「如何に、是れなる狂女、何とて舟よりは下りぬぞ。急いで上り候へ、あら優しや。今の物語を聞き候ひて落涙し候ふよ。なう、急いで舟より上り候へ。シテ」なう、舟人、今の物語は何時の事にて候ふぞ。ワキ「去年三月今日の事にて候。シテ」さて其の兒の年は、ワキ「十二歳。シテ」主の名は、ワキ「梅若丸。シテ」父の名字は、ワキ「吉田何某。シテ」さて其の後は、親とても尋ねず、ワキ「親類とても尋ね來ず、シテ」まして母とても尋ねぬよ、なう。ワキ「思ひも寄らぬ事。シテ

○言語道斷

道の邊の云々  
古墓何代人不知、姓與名、化爲路傍土、年々春草生。  
(白樂天)

は、きぎ  
その原や屋伏におふる常木のありとは見えてあはぬ君かな。  
(新古今集)

「なう、親類とても、親とても、尋ね來ぬこそことわりなれ。其の幼き者こそ、此の物狂が尋ぬる子にては候へとよ。なう、是れは夢かや、あら、淺ましや候。ワキ詞「言語道斷の事にて候ふものかな。今まではよその事とこそ存じて候へ。さては御身の子にて候ひけるぞや。あら、いたはしや候。シテ」今まではさりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りたるに、今は此の世になき跡のしるしばかりを見る事よ。さても無慙や、死の縁とて、生所を去つて、東のはての道の邊の土となつて、春の草のみ生ひ茂りたる、此の下にこそあるらめや。地「さりとは人々、此の土をかへして、今一度此の世の姿を母に見せさせ給へや。」

歌「残りてもかひあるべきは空しくて、かひあるべきは空しくて、あるはかひなきは、きぎの、見えつ隠れつ、面影の定めなき世の習、人間憂の花盛り、無常のあらし音添ひ、生死長夜の月の影、不

○不定の雲

定の雲おほへり。實に目の前のうき世かな。げに目の前のうき世かな。

ワキ詞「今は何と御歎き候ひても、かひなき事。たゞ念佛を御申し候ひて、後世を御弔ひ候へ。既に月出て、川風も早更け過ぐる。夜念佛の時節なればと、面々に鉦鼓を鳴らしすゝむれば、シテ母は餘りの悲しさに、念佛をさへ申さずして、唯ひれ伏して泣きゐたり。ワキ「うたてやな、餘の人多くましますとも、母の弔ひ給はんをこそ、亡者も欣び給ふべけれど、鉦鼓を母に參らすれば、シテ我が子の爲と聞けば、げに、此の身も、鳧鐘を取上げて、ワキ「歎きを止め、聲澄むや。シテ「月の夜念佛もろ共に、ワキ「心は西へと一筋に、二人「南無や、西方極樂世界、三十六萬億、同號、同名阿彌陀佛。地「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ「田川原の波風も、聲たて添へて、ツレ地「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、

○南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛。シテ「名にし負はば、都鳥も音を添へて、地子方「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

シテ詞「なうく、今の念佛の聲は、まさしく我が子の聲にて候。此の塚の内にてありげに候よ。ワキ詞「我等もさやうに聞きて候。所詮、此方の念佛をば止め候ふべし。母御一人御申し候へ。シテ「今一聲こそ聞かまほしけれ。南無阿彌陀佛。子「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。地「聲の内より幻に見えければ、シテ「あれは我が子か。子「母にてましますかと、地「互に手に手を取りかはせば、又消えくとなり行けば、いよく思ひはます鏡。面影もまほろしも、見えつ隠れつする程に、東雲の空もほのく」と明け行けば、あと絶えて、我が子と見えしは塚の上の草茫々として、唯しるしばかりの浅茅が原となるこそあはれなりけれ、なるこそあはれなりけれ。

○ます鏡

○浅茅が原

與謝野晶子  
歌人、詩人。故與謝  
野寬氏夫人。大阪府  
堺の人。明治十一年  
生。

二四 日本新女性の歌

與謝野晶子

東の國に美しく  
天の恵める海と山。  
比べよ、それに適はしき  
われら日本の女子あるを。  
中にも特にすぐれたる  
瀬戸の内海、富士の雪。  
その優しさとけ高さは  
やがてわれらの理想なり。

われらは懐く朗らかに、  
常に夜明の喜を。  
心の奥に光るもの  
春の日に似る愛なれば。  
日本の女子は誇らねど  
深く恃める力あり。  
輕佻浮薄の外ほかに立ち  
眞まことの文化に生きんとす。

〇恃む

〇輕佻浮薄

技術と學の一切を

今ぞおのく身に修む。

斯くして立つは新しき

御代の男子の協力者。

○聰明

聰明にして優雅なり。

愼しくして勇氣あり。

匂へる處女、清き妻、

智慧と慈悲とを満たす母。

固より女子の働くは

遠き祖先の遺風なり。

男子と同じ務にも

共に奮ひて進み出づ。

櫻と梅のひと重八重

開く姿は異なれど、

御國のうへに美しく

すべて香れる人の華。

穂積重遠  
法律學者、法學博士、  
男爵、東京帝國大學  
教授、帝國學士院會  
員、東京の人、明治  
十六年生。

二五 婦人の内助

穂積 重遠

婦人の努むべきことは何であるか。一口にいへば、それは内助である。家庭に於いてはその内部を整頓するのが婦人の務であり、國家に於いても、その内容を充實させるのが婦人の働きである。これは婦人に最も適した、而して、婦人でなければできぬ仕事である。婦人が各種の職業に就き、今まで男子の職業になつてゐた仕事、段々婦人に開放されることは結構であるが、一般の婦人の天分たる仕事としては、この内助を措いて外にないと考へる。

それについて思ひ起すのは、先頃亡くなられた土肥慶藏先生の事である。先生は唯醫學博士として偉かつたばかりでなく、人格は固より、文學方面の見識に於いても實に立派な方であつ

○天分

土肥慶藏  
醫學者、醫學博士、  
東京帝國大學名譽教  
授、福井縣の人、昭  
和六年薨、年六十  
六。

○還曆の祝

○壽像

○除幕式

○發起人

たが、還曆の御祝の時に、先生の徳を慕つてゐる人達が、先生の壽像を作つて、それを博士邸の庭に建てた。その除幕式に私も参列したが、その胸像の下に先生と奥様が並んで立つて居られる、その前へ發起人總代を初めとして、参列の名士が、かはるゝ出て祝辭を述べ、土肥先生の功績を稱へる演説をされた。私は、それを聴いて、今更ながら偉い先生だと感じたのであるが、演説者が、皆先生のみを賞め稱へて、目の前に並んで立つて居られる奥様の事を少しもいはない。この次の人がいふだらうと思つてゐても、誰もいはない。私は何となく物足らぬ氣持がしてゐた。ところが、最後に立つたのが當時の駐日ドイツ大使ゾルフ博士であつた。博士は非常な雄辯家である。ドイツ語演説であつたが、實に立派な祝辭であつた。ゾルフ博士は、他の人々と同じく、先づ土肥博士の業績を十分に賞揚したが、更に言葉を改めて、

ゾルフ博士

ドイツの政治家、西  
曆一八六二年生。

○業績

○賞揚する

○絶大の

○溜飲が下る

土肥博士が斯く學徳共に大成されたのは、博士の人格と努力とによる事勿論だが、併しそれは博士一人の力ではない、博士夫人の内助によつてである、我輩はこゝに博士夫人に絶大の敬意を表する、斯う述べたのである。私は、その一言を聽いて、先刻から胸に溜つてゐた溜飲が一度に下つたやうな氣持がした。

○好典型

殊に私が面白く思つたのは、ドイツ語演説中にゾルフ博士が特に「ナイジヨ」と日本語を挿んだことである。多分この内助といふ言葉にちやんと當る外國語がないのであらう。勿論西洋婦人も内助をする。併し、内助は日本婦人の特長たる美德である。土肥博士夫人がその好典型であるのを、却つて日本人が氣がつかず、外國人たるゾルフ大使に指摘されたのである。

○切望する

誠に内助は日本婦人の特長である。私はこの特長が益發揮されんことを切望する。而して、私がそれをいふのは、必ずしも

今まで世間でいばれたのと同じ意味ではない。もつと強い意味である。普通一般の考へ方では、婦人自身も内助といふことを單に家庭内の手傳ひ仕事に過ぎぬやうに思ひ、その眞價値を十分に自覺自重してゐない。而して、男子は又、婦人の内助につき十分な感謝と尊敬とを拂つてゐない。私はそれを豫々遺憾に思つてゐた。然るに、ゾルフ大使は、内助が婦人の本分であり、成功が夫妻協力の結果なることを明言したのであつて、私がそれを聽いて溜飲が下つたのは、その日その席の溜飲が下つただけではないのである。

内助は確に家庭の仕事である。併しながら、同時に、國家の仕事であり、社會の仕事なのである。我々男子は、從來偉さうに、國家社會の事を男だけの力でやつてゐる様に思つてゐたが、それは大變な間違で、國家社會は男と女とで組立ててゐるのである。



○片棒をかつぐ

男女で片棒づつかついでゐるのであつて、男だけで背負つてゐる國家でもなければ、女だけで背負つてゐる社會でもない。それ故、婦人が更に一層自覺して、内助なることが頗る大切な仕事であるといふことを考へねばならぬと同時に、又、男子は婦人の内助が如何に有力であるかを考へ、婦人内助の力によつて我々はこの日本を背負つて立つことができるのである事を、十分に認識し、尊敬し、且、感謝せねばならぬと思ふ。

然らば、今日日本婦人のなすべき内助の仕事は何か。先づ以て家庭の美化淨化である。今日の世の中は實に殺風景である。毎日の新聞を見ても、いやな事ばかり目につく。家庭にも種々の悲劇があり、社會には忌まはしい事件が續出する。何とかして世の中をこの殺風景から救ひ、この醜い世の中を本當の人の世らしい美しい世の中にしたと思ふ。而して、人生美化淨化

○殺風景

○適任者

の一番の適任者は婦人である。今日のこの殺風景を救ふものは、日本婦人が古來もち傳へたる優雅の婦徳より外ないのである。

日本は元來極めて優美な國だつた筈である。然るに、だんだん進歩發展するにつれて、人間の心の美しさが次第に喪はれて行くやうに思はれるのは、誠に遺憾な次第である。人或はこれを物質文明の弊といふ。私はさういひたくない。精神文明が物質文明に伴なはぬ弊といひたい。人間がこゝまで進んで來たのは物質文明のお蔭である。この驚歎すべき物質文明を逆戻りさすべきではない。益、進展せしむべきである。物質文明も亦人間の驚くべき精神力の發現である。その精神力を更に一層精神文明の方に働かせ、精神文明が物質文明に並行するのみならず、それをリードするやうにありたいと思ふ。必ずしも、

○リードする

物質文明が男の仕事で、精神文明が女の仕事だとはいはない。併し、精神文明の振興は婦人に最も適する仕事であるから、婦人は主としてこの方面に力を注がれたい。即ち、私が特に日本人に期待するのは、婦人の美德による國家社會の淨化美化である。而して、家庭が集つて國家社會を成すのであるから、國家社會を淨化し美化せんには、先づ家庭を淨化し美化せねばならぬ。我が國の家庭は昔から美しいものであつた。萬葉集に、

憶良らは云々

萬葉集卷三にある。

憶良らは今はまからむ子泣くらむ

そのこの母も吾を待つらむぞ

といふ山上憶良の歌がある。「私の妻」と直接には「子供のお母さん」と呼んだ所に、我が國の家庭の親しみがあらはれてゐる。日本の家庭では、夫が外で一日働き「吾を待つらむぞ」と急いで歸つて來ると、家事にいそしんでゐた妻がきげんのよい子

供の手をひいて笑顔で出迎へる。この日本婦人の内助、これが決して軽いことではないのであつて、これあるが故に我が國は永久であり盛大であるのだと思ふ。

萬葉集の中に今一つ夫婦の情愛をよんだ大變よい歌がある。讀人不知で、歌の内容から見ても身分の低い人の歌と思ふが、夫婦が歌で問答してゐるのであつて、先づ妻が夫に長歌で、

つぎねふの歌

萬葉集卷十三にある。

〇背

つぎねふ 山城道を 他夫の 馬より行くに 己夫し 歩  
より行けば 見る毎に 音のみし泣かゆ そこ思ふに 心  
し痛し たらちねの 母が形見と わが持たる まそみ鏡  
に 蜻蛉領巾 負ひなみ持ちて 馬替へわが背

とよみかけてゐる。山越えの道を、よその夫は馬に乗つて行くのに、うちの夫は歩いて行くので、見てゐる妻の身として、聲を上げて泣きたくなる、思つただけでも胸が痛い。どうかして馬に

乗せて上げたいと思ふけれども、家貧にして何の貯へもない。何をがなと考へたところ、こゝに一面の鏡がある。當時としては貴重品、況んや鏡は女の魂であり、更にその上母親の遺物といふのだから、自分に取つては命から二番目の大切な品であるが、これを提供しませう。それでも足りぬかも知れないから、私の大事な蜻蛉の羽根のやうに透いたこの肩掛も差出させう。この二品を取揃へて持つて行つてそれで馬をお替へなさい、我が夫よ、といふのである。實に真情の籠つたよい歌であつて、日本の妻が己を空しくして夫を思ふ貞節は昔からこの通りだつたのである。

山内一豊夫人の話は有名であり、貞女の鑑とされてゐるが、しかし、それは一豊夫人の專賣特許ではない。千年の昔既に立派な先例があつたのである。而して、一豊夫人の場合には、一豊は

山内一豊

豊臣時代の武將、信長・秀吉・家康の臣、土佐に封ぜらる、慶長十年(一六〇五)歿、年六十一。

山内一豊夫人

近江淺井氏の臣、若宮友興の女、元和三年(一六二七)歿、年六十一。

○專賣特許

夫人が鏡の函から出した金で馬を買つたのであつて、これ亦妻の折角の志を無にしないことで結構だが、萬葉集の夫は妻の差出した鏡と肩掛を受けなかつた。

馬替へばいもかちならんよしえやし

石は踏むともあはふたり行かむ

といふ短歌で斷つた。そなたの志は嬉しいが、私ばかり馬に乗つてそなたを歩かせる譯には行かぬ、えいまゝよ、馬を買ふことはやめにしよう、たとひ険しい石道を踏むとも、我々二人は手にと手を取つて一緒に歩いて行かうぞ、といふのである。

これ亦歌として秀逸であるのみならず、自分さへよければといふ我儘を捨てて、夫婦同體の實意を示したところ、誠に奥ゆかしい限りである。私は日本婦人が萬葉以來引續きかの妻と同じ氣持であることを疑はぬが、更に日本の男たちに萬葉の夫の

○よしえやし

○あ

○秀逸

○行路難

歌をよく味はつて貰ひたい。

扱て、私は右の歌の「石は踏むとも」の一句を殊に意味深く思ふ。人生行路難、どの様な困難が起るかわからぬが、夫婦相倚り相扶けて如何なる困難をも踏み越えて行かう、といふのであつて、實に頼しい立派な覺悟である。而して、私はこの夫の歌の下の句を、單に夫婦の間のみならず、國民一般に當てはめたいと思ふ。即ち、我が國今日の非常時に處し、國難を打開する爲には、國民全體が一致團結し、「石は踏むとも」「九千萬人」共に行かむ」の覺悟を以て進む外ないのである。九千萬人の一半は男子であり、一半は婦人である。萬葉の夫婦が各、己を空しくして相提携した如く、國民全體としても男子と婦人とがそれぞれその本分を全くして相扶け相伴なひ、如何なる險難をも踏み破り正義を指して眞直に進みたいものである。

○相提携する

○國難を打開する

○女丈夫

○適例

源頼朝 義朝の第三子、武家政治の創始者、正治元年（八五九）薨、年五十三。  
源政子 北條時政の女、嘉祿元年（八五五）薨、年六十九。  
○左右する

妻たる事と並んで大切な婦人の本分は母たる事である。婦人が母としての本分を盡くすか否かは、次の時代の人類が善くなるか悪くなるか、將來の日本が盛になるか衰へるかの岐れ目である。勿論、父親も重きをなすが、朝起きてから夜寝る迄引續き子供に接觸してゐるのは母親であるから、母親が善いか悪いかは直接に子供の善い悪いと關係する。それ故、婦人が母親としての任務の大切な事を十分に自覺せねばならぬと同時に、男子は又婦人の母親たる地位を尊重すべきである。

斯様に妻たること母たること、が婦人の本分であつて、歴史上賢婦人、女丈夫といはれた人が同時に良妻賢母であつた例は澤山あらうが、時には賢婦人、女丈夫にして、妻とし母としては落第のものもないではない。その適例は頼朝の夫人政子である。政子は所謂尼將軍として天下の政治を左右したのであつて、賢

物いはぬ  
詞書「慈悲の心を」  
金槐和歌集所収。

婦人であり女丈夫であるには相違ない。しかし家庭婦人としては果してどうであつたか。その子たる源實朝の歌に、

物いはぬ四方のけだものすらだにも

あはれなるかなや親の子を思ふ

といふのがある。言葉も解せぬ野山の獸さへも親の子を思ふ情はあれ程までに切なるものよ、といふのである。その歌の裏には次のやうな氣持が痛切深刻にあらはれてゐる。禽獸さへも親は子を思ふのに、母上はどうして我々に對して母たる愛情をもたれないのか、實に情ない悲しいことだ、といふのである。實朝は又

いとほしや見るに涙のとまらず

親もなき子の母をたづぬる

と歌つた。誠に人生最大不幸の一つは、親なきこと、又親があつ

いとほしや  
詞書「道のほとりに  
幼き童の母を尋ねて  
いたく泣くをそのあ  
たりの人に尋ねしか  
ば、父母なむ身まか  
りにしと答へ侍りし  
を聞きて」金槐和歌  
集所収。

○位人臣を極める

ても親に愛して貰へぬことである。殊に母の愛は子に取つて何物にも替へ難く貴重である。實朝に歌はれた孤兒も「母よ、母よ」と泣いた。實朝自身も、位人臣を極めながら、母の愛なきが故に泣いた。

母の愛は實に大切である。單にその子を人とならしめる爲に大切であるのみならず、次の日本を作り上げる國家的大事業のために大切なのである。即ち、婦人は母として先づ愛情がなければならぬ。單に賢婦人たるのみでは足りない。併し又、愛情だけではいけない。本當に物の道理がわからねばならぬ。子が少し成長すると母親は忽ちその話相手相談相手になれなくなる。母と子が別世界に住み、子の方でもあたまから「お母さんには解らない。」ときめこんで母親に寄りつかぬやうになる。實に淋しく悲しいことではないか。故に、母親は愛情がな

○盲目の愛

ければならぬが、又、見識がなければならぬ。子を愛するのみでは足らぬ。子に尊敬されねばならぬ。子が母を愛慕し尊敬し、心の中を打開けて相談する様でなくてはならぬ。我が國の婦人は愛情に於いては缺ける所がない。併し、盲目の愛ではいけない。子を敬服させるに足るだけの見識を伴つた愛情でなければ、本當に母親として本分を全くする事ができない。それには我が國の婦人はまだ、大いに修養を積みねばならぬと思ふ。今一奮發して、從來の美點を益發揮すると同時に、その不足缺陷を遺憾なく充實されたいものである。

男子も亦さらに修養を積むべきこと勿論であるが、斯くして一層完成せられたる日本男子と日本婦人とが、所謂「石は踏むとも共に行かむ」の大決心を以て、相扶け相補つて家庭を築き國家を擔ふならば、非常時何かあらん、國難何するものぞ。徒に

○周章興奮する

非常時國難來を叫んで周章興奮する必要はない。たゞ男女各自その本分を盡くさんのみである。

斯くして我々は男女心を併せ一致團結して我が日本國を守り立てて行かねばならぬのであるが、もしそこに確乎たる中心があれば、一致團結は最も力強いものになる。而して、我が國民一致團結の唯一無二なる最も力強い中心點が皇室であらせられることは多言を須ひぬ。今一度實朝の歌を引けば、

山は裂け海はあせなん世なりとも

君に二心わがあらめやも

我々日本國民は、平常時といはず非常時といはず、この忠誠を以て終始するのである。實朝の歌に又、

大海の磯もとゞろに寄する浪

われてくだけて裂けて散るかも

大海の  
詞書「あら磯に浪の  
よるを見てよめる」  
金槐和歌集所收。

○終始する

○巍然たり

○屹立する  
○狂瀾怒濤

といふのがある。打寄せる大波の力強さを詠ずると同時に、その怒濤が岩に當つて砕け散るその大磐石の巍然たるところを歌つたもので正しく今日の日本の姿である。我が日本は今や世界の大海原に大磐石の如く屹立してゐる。狂瀾怒濤が後から後から押寄せて來ても、砕け裂けて散つてしまふ。何とも心強い限りである。併し斯くあらんが爲には我々が本當に心をひきしめて、強い所は強く、優しい所は優しく、男と女とがそれぞれの特長を發揮して、清く美しき社會を築き上げねばならぬ。而してその根本は即ち家庭を清く美しくする事であつて、その大責任は婦人にかゝつてゐるのである。

(大阪朝日新聞)

聖代女子國語讀本 卷八終

(略名) 星野吉澤女國

昭和十一年七月二十三日  
 昭和十一年七月二十三日  
 昭和十一年七月二十三日  
 昭和十一年七月二十三日  
 昭和十一年七月二十三日  
 昭和十一年七月二十三日  
 昭和十一年七月二十三日  
 昭和十一年七月二十三日

印刷發行  
 印刷發行  
 印刷發行  
 印刷發行  
 印刷發行  
 印刷發行  
 印刷發行  
 印刷發行

聖代女子國語讀本  
 定價金 六拾錢

著者 吉澤義則

發行者 東京都神田區岩本町三番地 中等學校教科書株式會社

代表者 山本慶治

印刷者 京都市下京區壬生川通五條下ル 藤澤淨圓



發行所

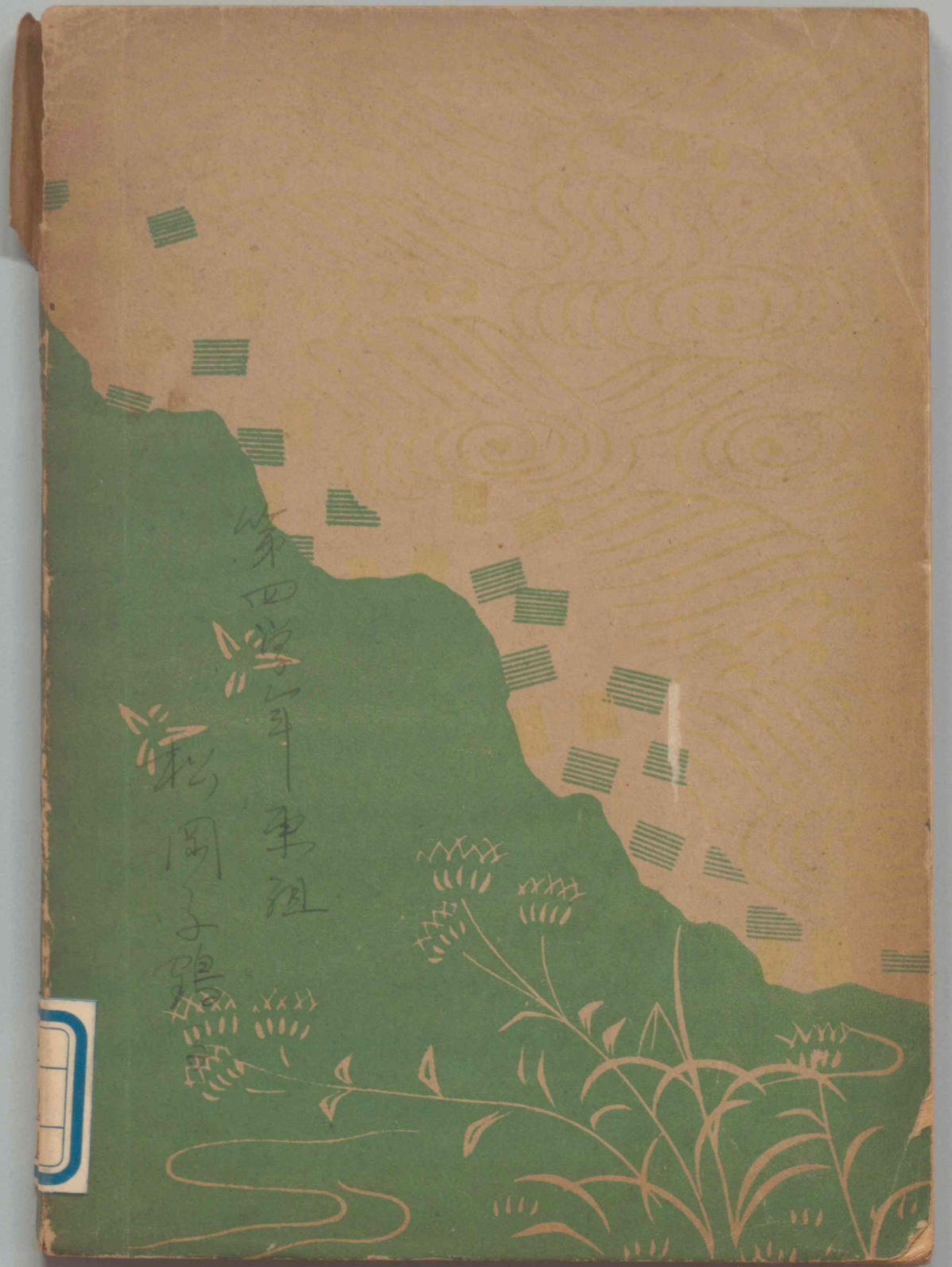
東京都神田區岩本町三番地  
 中等學校教科書株式會社  
 日本出版會會員番號 一一七五二二

配給元 日本出版配給株式會社  
 東京都神田區淡路町二ノ九

第四学年 素描

松岡子 繪子





第四卷  
松岡子

